

女の子はもっと伸びる

未来を担う少女たちに今
必要なチカラと環境



はじめに	1
------------	---

第1章 女の子を取り巻く現状

日本の女性の現状	2
女性の捉えられ方	4
日本社会の変化	5
学校教育	6
女子校	7
社会を担うために必要とされているスキル	8
少女・女性にとっての壁	10
少女自身が持つ内なる壁	11
女の子を育てるフォーラム 基調講演 21世紀の女性を育てる	14
昭和女子大学 学長 坂東眞理子氏	

第2章 ガールスカウト日本連盟の調査

調査の目的	16
調査概要	17
ガールスカウト活動で培われる3つの力	18
積極的に人と関わる力	18
仲間と成し遂げる力	19
挑戦しようとする力	20
自己肯定感	22
ジェンダーに偏らない世界観	24
ガールスカウトでなぜ、このような力が育つのか?	26

第3章 少女・女性の可能性を伸ばす7つの条件

少女・女性の可能性を伸ばす7つの条件	28
真のパートナーシップを育てるために	36
おわりに	38
ガールスカウト日本連盟の 「長年の課題」への挑戦	40
学校法人恵泉女学園 学園長 松下俱子氏	

女の子には、女の子の 力の伸ばし方がある

女性の幸せは多様化しています。

「結婚か仕事か」「仕事か家庭か」といった二者択一式の選択を余儀なくされた時代から、「結婚も仕事も」「仕事も家庭も」、加えて、「結婚も仕事もボランティアも」といった複数の選択および、企業等でのリーダー的な役割につくなど、さまざまな形で社会に貢献することが求められています。

「女性の力の活用」ということばの広がりとともに、政治・経済界では女性の社会参加への機運が高まっています。その一方で、女性の力を生かすための基盤は依然不足しており、結婚・出産・育児というステージを経て社会に参画することが難しく、働き方が多様化しつつある中でも、まだまだ女性にとって厳しい社会といえます。

私たちガールスカウトは、世界最大の少女と女性のための社会教育運動で、145の国と地域で「少女と女性が自らの可能性を最大限に伸ばし、発揮できる社会」を目指して活動していますが、誕生以来100年の歴史の中でも、現代の少女たちは、著しく急速な社会変化の中におり、何が正解かがわからない未来に不安と期待を抱えていると言えます。

彼女たちには、生まれながらに高度な技術やツールが身近にあり、世界との距離が縮まる一方で、未だ、家庭・学校・地域社会には「女の子だから」「女の子らしく」という古くからの強い役割分担意識、ステレオタイプ（固定観念）が残っており、少女は少年に比べてさまざまなことに挑戦する機会が多くありません。何かしらの制限がかかり、本来持っているはずの自分の可能性に気がつけずに大人になることは、本人にとっても、力を活用したい社会にとっても、もったいないことです。

現代社会においては、少女たちが幼い頃より主体的になり、自分の持つ可能性を開花させ、未来を自らの手で切り拓くためには、取り払っていくものや備えるべきチカラと必要な環境があるのです。

第1章では、現在の日本における少女を取り巻く現状について考え、第2章では、ガールスカウト日本連盟がおこなった独自調査の結果をご報告し、第3章で、少女と女性の力を伸ばすための7条件を提案します。

本書を通して、未来を担う女性となる、現代の少女たちが置かれている環境をともに考え、これからの人生を自分の力で切り拓いていかなければならない少女たちに明るい未来が提供できるよう、今から、私たち大人ができることについて、立ち止まって考えるきっかけになればと思います。



第1章

女の子を取り巻く現状

2013年厚生労働省がおこなった若者への意識調査において、15～39歳の独身女性の3人に1人が「専業主婦になりたい」と望んでいる、という結果^{※1}が出ました。また、別の調査^{※2}では「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」という考え方に対して「賛成」が「反対」を上回りました。10年連続で減少していましたが、今回は一昨年より「賛成」が10%増え、「反対」を上回りました。よりよい社会を創るために「女性の力の活用」が政治・経済界から積極的に推進され、IMF（国際通貨基金）^{（注1）}には、「日本社会の発展のために女性の社会参画が急務だ」と警鐘を鳴らされるなか、現在を生きる少女や女性の心は社会参画とは違う方向に向かっているようです。依然、日本には、女性が社会に出て行きにくい、力を発揮しづらい現状があるからではないのでしょうか。

（注1） IMF：ワシントンD.C.に本部を置く、通貨と為替相場の安定化を目的とした国際連合の専門機関。2013年度現在、加盟国は188カ国。

日本の女性の現状

Women in Japan

男女平等指数 3年連続低下 105位

世界各国の男女平等の度合いを示す「男女平等指数」^{※3}において、2013年に日本は136カ国中105位となり、前年度から4つ順位を下げました。この指数は、教育機会、保健・医療への機会、政治参加、経済的機会の4分野で、男女がどの程度平等であるかをあらわしていますが、日本は教育と保健に関しては世界順位が高いものの、政治・経済への女性の参画が著しく低い現状があります。

2030運動

日本政府は2013年度より、あらゆる指導的地位に占める女性の割合を2020年までに30%程度にする「2030運動」という取り組みを開始しました。2012年12月現在、女性の割合は国会議員（衆議院）で7.9%、高等学校教頭以上で7.3%^{※4}でした。世界経済フォーラム^{（注2）}も、日本の男女間格差を深刻に受けとめ、2015年までに日本の経済的男女格差10%縮小を目的とした、「ジャパン男女平等参画タスクフォース」を発足させました。

（注2） 世界経済フォーラム：スイス・ジュネーブに本部を置く、非営利組織。

就業率

女性 69.2% (24位)

男性 91.5% (2位)

日本では25～54歳の男性の就業率は91.5% (世界第2位)^{※5}であるのに対し、女性は69.2%で、調査対象34カ国中24位にとどまっています。OECD (経済協力開発機構)^(注3)は「日本政府は、女性の労働参加を妨げる要因への対策を取るべきである」として、質の高い保育サービスの提供、ワーク・ライフ・バランスの改善、長時間労働の削減や勤務時間の柔軟性向上等の対策を求めています。

(注3) OECD: ヨーロッパ諸国を中心に34カ国の先進国が加盟し、経済・社会・ガバナンスの課題に取り組む国際機関。

男女間の給与格差

およそ30%

男性の平均給与を100とすると、女性の平均は70程度であり、その差は約30%になります。妊娠出産による退職や、給与の高い管理職に女性が少ない(100人以上の民間企業の女性管理職(部長以上)の割合は4.9%^{※4}) ことがその要因にあげられます。また、正社員で、妊娠・育児を機に退職する女性のうち、2年後に再度正社員として復帰できる割合は8.1%と非常に低いです。

単身女性の

3人に1人が貧困

20～64歳の単身で暮らす女性の3人に1人(32%)が「貧困」状態(年収が114万円未満)^{※6}にあります。男性の貧困率は20～25歳では20%で、同世代の女性より上回りますが、その他の年齢層では女性が男性を上回っています。貧困者全体の57%は女性で、男女差は広がっています。一人暮らしの女性世帯の貧困率は、勤労世代で32%、65歳以上では52%、19歳以下の子どもがいる母子世帯では57%になり、女性が家計を支える世帯に貧困が集中しています。

女性の総理大臣

ゼロ

195ある独立国中、女性が元首をつとめる国は17カ国^{※7}です。日本ではこれまでに一度も女性の総理大臣が誕生していません。

このような女性たちの現状を、メディアを通して目にすることで、将来、自分が大人になったときには、「結婚か就職かの二択しかない」「子どもは預けられない」「一人の女性として生きていくのは大変」など、不安を抱く少女たちがいます。

How women are perceived

女性の捉えられ方

Japan

白衣ではなく、
割烹着をつけて実験
研究室の壁はピンク、
キャラクター好き、
デートは…

理化学研究所の小保方晴子博士率いる研究チームが万能細胞STAPについて発表した際、発明内容や医学的な貢献よりも、発明とは関係がないことが強調して伝えられました。海外では年齢、性別、服装等は報道されず、研究への期待や医学的発展への貢献についての記述が主でした。

Overseas

私は、ハーバード大学の
女性総長ではありません
ハーバード大学の総長です

世界有数のハーバード大学のドリュー・フォースト総長の就任時のことばです。380年近い歴史を持つ同大学の28代目、そして初めての女性総長となった彼女が、「女性総長」と呼ばれることを公の場で拒否しました。男女平等が進んでいるかに見えるアメリカにおいても、女性への固定的な見方が存在します。

「結婚したいですか？」
「彼氏はいますか？」
「将来、子どもは欲しいですか？」

2011年、女性サッカーのワールドカップで優勝した「なでしこジャパン」がテレビ出演した際、成し遂げた成果に比べ、女性への固定観念に基づく質問が多く浴びせられました。これに疑問を呈する報道^{※8}はありましたが、一部でした。「サムライブルー」である男子サッカーチームが優勝したら、同じ質問がされるのでしょうか？ 男子チームに比べ、なでしこジャパンに対する待遇の違い（飛行機の座席など）に対して、外国メディアからは厳しい指摘^{※9}がありました。

「世界で最も影響力のある
女性100人」に日本人女性が
選出されない

毎年米フォーブス誌が発表する「世界で最も影響力のある女性100人」において、2005年の現横浜市長の林文子氏を除き、残念ながら日本人は現在までに選出されていません。資産額、メディアへの露出度、そして社会への影響力の3つを基準に選出されますが、2013年の1位はドイツのアンゲラ・メルケル首相。ミッシェル・オバマ米大統領夫人、ヒラリー・クリントン前米國務長官はそれぞれ4位、5位で、日本人はゼロでした。

冬季オリンピック
スキージャンプ2014年より
女性の参加可能に

男性が参加した1924年から90年を経て、女性は冬季オリンピックのスキージャンプに初めて参加しました。女性がこの競技へ参加できなかった主な理由は競技人口にあります。特定のスポーツを女性に禁じることは性的偏見に根差しています。特に、厳しい肉体的活動は、女性の生殖器官にとって危険であるという古典的な考え^{※10}に基づいています。

破壊的技術革新

2000年に入った頃から社会にあふれる情報量が飛躍的に増えました。ここ10年で一般の生活者が接する情報量は400倍以上に増え、前年度の3～4倍^{*11}になっています。

真のグローバル人材を目指し、学び方の変化

大学ではアクティブラーニング型の授業（ディスカッションや体験的な学習）が増えています。世界の有名大学がオンライン上に無料で配信する「大規模公開オンライン講座：MOOCs」なども急速に広まり、インターネットに接続できれば世界中どこにいても誰でも無料で、高度の教育が受けることが可能になりました。日本各地でタブレットPCを導入する公立小学校等が増えており、学び方・教え方に変化が起こっています。内向き志向により、日本の学生は海外留学に対する意欲が低いと言われますが、実際には制度の壁や情報が十分でないためとも言われます。

21st Century...

働きかた・雇用環境の変化

もはやワーキングマザーは珍しいことではありません。在宅勤務の他に、雇われない働き方やノマドワーカー（会社以外の場所でパソコンなどを使って作業する）という選択肢が浸透しつつあり、仕事を自分で作り、働き方を選ぶ生き方が社会的に注目され始めました。今ある仕事は近い将来なくなるかもしれない、逆に、新しい仕事がつくり出されていくでしょう。

ワーク・ライフ・バランス (仕事と生活の調和)

仕事と生活のバランスのとれた人生を生きることが求められています。企業は、社員が働きながら個人の生活を充実させ、能力を最大限に発揮して会社に貢献することを期待し、そのための取り組みを進めています。個人でも、仕事だけではない大切なものや、社会的責任を果たすための時間を重要視する人が増えてきました。

日本人女性の価値観の変化

女性に対する日本社会や世界からの見方が変化し、さらには女性自身の自分への捉え方もポジティブに変化しました。「自分の裁量で働きたい」「好きな・興味のある分野で仕事をしたい」「技術・資格・知識を活用したい」という理由で^{*14}起業家精神が高まりつつあり、国内にとどまらず、世界でグローバルに活躍する日本人女性を目にすることが珍しくありません。

デジタルネイティブ

1980年以降に生まれた人は、生まれながらにインターネットや最新のモバイル端末に接して育ったため「デジタルネイティブ」と呼ばれています。変化のスピードが違う世界を生きているため、思考・生活習慣が10年前とは格段に異なります。コミュニケーションや情報収集の仕方が変化し（20代女性スマートフォン普及率60%^{*12}）、世界の情報を自分の力でいち早く知ることができます。情報過多により、選択や判断に疲れていたり、直接的コミュニケーションの欠如、ネット中毒などが問題視される一方で、「今までの世代よりも賢く俊敏であり、多様性を受け入れている」という調査報告^{*13}があります。

日本社会の変化

現代の急激で革新的な変化は、課題だけではなく、新しい価値観をつくり、生き方の選択肢を広げています

男性・父親の意識の変化

意識的に家族を大切にしようとする動きが夫婦双方に見られ、特に夫の側で強まっています。育児を大切に考える考えが男性に浸透し始めてきたので、妊娠・出産適齢期にも仕事を続ける女性が増えてきました。

ボランティア活動への 関心の高まり

東日本大震災後、社会貢献意識に変化が見られます。全国の約2割の小中高生が「被災地と主体的にかかわりを持った」と回答^{*15}し、その7割が「互いに助け合って生きることの大切さ」や「どんな厳しい状況でも生き抜く力」の必要性を感じ、5割近くが社会貢献への意欲やボランティアへの関心を高めています。ボランティアへの参加経験者は24.6%、寄付経験者は37.2%^{*16}となり、特に寄付については大きく増加しました。

OECDが65カ国で15歳を対象に実施した国際学習到達度調査で、日本は最も平均得点の高い国の一つとなりました。数学的リテラシー第2位、読解力第1位、科学的リテラシー第1位とハイスコアです。しかし、点数には男女格差が存在します。

日本では、より多くの女性が四年制大学や大学院に進学するようになり、2011年はこれらの卒業者のうち42%が女性でした。しかし、選択する学問分野や専攻には明確に偏りがあります。女性は自然科学や工学の分野には少なく、2011年は工学・製造・建築の高等教育プログラムの卒業者における女性の割合は11%で、比較可能なOECD加盟国の中で最低でした。自然科学分野での卒業生の26%は女性で、2番目に低い割合^{*17}となっています。

■男女間の点数の格差（数字は男子の点数－女子の点数）

		2003	2012	解説
数学的 リテラシー	日本	8	18	2003年は男女間の得点差は比較的小さかったが、2012年には明らかに男子が高得点
	アメリカ	6	5	男女の成績は同程度
	OECD平均	11	11	男子の方が高得点
読解力	日本	-30	-24	2003年は女子がかなり成績がよかったが、2012年にはその差は縮まった
	アメリカ	-29	-31	女子が成績がよいが、2012年の男女差とはあまり変わらない
	OECD平均	-32	-38	女子の方が高く、2012年にはその差が広がった。
科学的 リテラシー	日本	3	11	2003年は男女の成績は同程度だったが、2012年には明らかに男子の成績が高い
	アメリカ	1	-2	男女の成績は同程度
	OECD平均	6	1	男女の成績は同程度

PISA2012年調査結果発表 および 2003年調査結果発表 から作成

2012年の結果をみると、数学は男子の方がよくできる（65カ国中37カ国）が、女子の成績がよい国も5カ国ある。参加国の男女間の得点差は比較的小さいが、日本においては、この9年間に差が広がった。世界的に、女子生徒は数学を学習する意欲が男子生徒より低く、また学力への自信も少ない。読解力は女子生徒の点数が高く、この9年間にその差が11カ国・地域で拡大した。日本ではその差は逆に縮まった。参加国の科学の成績は男女同程度。日本においては2003年にはあまり差がなかったが、この9年間に男子の成績がよくなった。

女子が男子と直接に比べられない環境である女子校では、女子は科目に制限なく学力を伸ばすことができると報告されています。ちなみに、男女別学で教育を受けているイスラム教の国々では、数学のテストの点数には男女差がほとんど見られないそうです。

まわりの期待度が、生徒の学力に影響を与える、という報告もあります。

欧米の研究^{*18}によると「教師の言動や教室運営のなかにジェンダーの偏りがある場合、それがさまざまな影響を生徒たちに与える」という報告があります。例えば、教師に『数学＝男子が得意である』という先入観があると、難しい質問は男子を指名し、回答までの待ち時間を長くとりなどして、「期待感」を表します。教室内は、その男子生徒が「数学が得意である」と認めるようになり、仮にうまく答えられなくても「次回はがんばれよ」とか「やればできるはず」などといった励ましが送られると、その生徒には高い期待があることを意味します。逆に、女子に対しては始めから難しい質問をおこなわず、答えられなければすぐに次の人を指名することがありま

す。このような対応を受けた女子生徒は、数学では「自分は期待されていない」という感情を抱き、数学に対して努力しようという気持ちが育ちません。

教師からほめられることで、自己評価が高くなり、頑張った結果成績があがる、という調査結果^{*19}は日本にもあります。「(調査は)先生のほめ言葉とクラスでの成績の関係をみたもので、性別を問わず先生からほめられる生徒の方が成績がいい。ここでのほめ言葉は成績に限定しないもので、自分の「学力」「性格」「友だち関係」に対する満足感とほめ言葉との関係を見ると、先生からほめられる生徒は自分に対する満

「多くの諸国の男子と女子が主要科目で同等によい成績を収めていることは、誇るべきことである。しかし、依然としてジェンダーのステレオタイプが残っていることに満足はできない。読書は男子のすることではない、数学は女子がやることではないといった態度は、人間の潜在能力という点からみてコストが非常に高くつくので、改めなくてはならない」

アンヘル・グリアOECD事務総長

(出典) OECD、生徒は依然としてジェンダーの認識に抑制されている、2009年5月26日

足度が高い。成績がよい生徒を教師がほめるといよりも、教師からほめられることで、自己評価が高くなったり、がんばった結果成績があがる、ということが考えられます。果たして、日本の女子生徒に対するほめ言葉は十分でしょうか。

女性の教員の割合も、就学前教育と短大を除いて、他のOECD加盟国よりも低くなっています。2011年の小学校教員の65%が女性教員（OECD平均82.1%）、中学校で41.7%（同67.5%）、高校で28.4%（56.5%）、大学および大学院で19.1%（同38.7%）となっており、少女たちが実際に目にする働く女性のロールモデルが少ない状況^{*17}です。

日本の学校制度は教育機会の観点においては平等性が確保されています。しかしながら、「結果の平等」についてはどうなのでしょう。男女共に、同じように力は養われているのでしょうか。

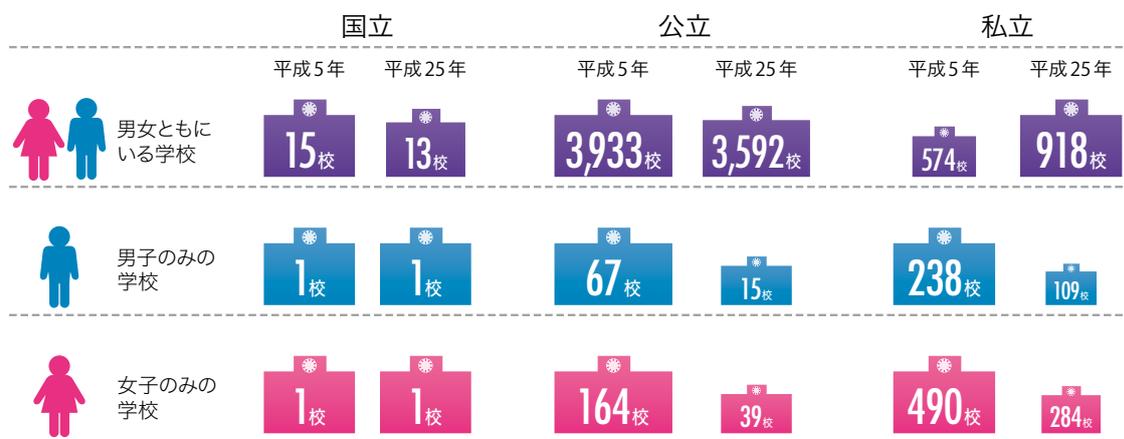
昨今、教育における「性差」研究が注目され、特に脳レベルの性差に関する本が多く刊行されていますが、脳の構造や機能、ホルモンの違いがどのように学習へ影響するか等については、証明することは非常に難しいです^{*20}。また、男女の差異はあって当然です。本当の問題は「違いの有無」ではなく、「違いがどのように意味づけられているか^{*21}」ではないのでしょうか。

Education for Girls

女子校

日本国内の女子みの高校は、2013年には324校^{*22}となり、20年前から半減しました。男子みの高校は6割減です。90年代頃から「男女共同参画の時代、共に学び合うことが大切」「世の中には男と女がいるのだから、学校も男女共学があるべき姿」という考えが広まり、少子化の波も受けて、共学化するところが相次ぎました。

■女子教育の場が減る一方の日本



(出典) 文部科学省学校基本調査(平成5年・25年)

諸外国では、女子校・女子大は総合的に女子の力を伸ばす場所として、その存在や成果が認められています。アメリカやオーストラリア、ニュージーランド、ロシア、イギリスなどにおいて、女子校に通う生徒は「共学校の女子に比べて成績がよく、数学や科学を選択する割合が高い」ことは比較的知られています。これには学習環境が大きく影響しています。ある研究^{*23}で、イギリスの大学である講座を女子のみ、男子のみ、男女混合に分割して実施したところ、女子クラスの平均点は7.5%も上昇しました。女子クラスに参加した学生は「教室の雰囲気は親和的」「黒板のところに行って質問に答える勇気はそれほどなかった」と言っています。「危険を冒すことを

嫌がる」女子は「将来、職場での昇進競争をしたがらず、それが「成功の機会に悪影響を及ぼすかもしれない」と危惧しているようだ」と報告されています。女子校の女子は「より危険度の高い、競争的な選択をする」傾向があるといえます。女子校は、女子の冒険心や競争心をうながし、ひいては将来の職場で発揮されるリーダーシップを育む土壌があるという報告もあります。同報告書では、男女共学の学級では「子どもをとりまく周囲の大人、すなわち身近なロールモデルとなる親や教師が、無意識のうちに子どもに固定的性別役割分担意識を押し付ける」という状況となりやすい、とも指摘されています。

Competency

社会を担うために必要とされているスキル

激しく変化する社会において、
これから生きる若者（男女問わず）に
必要とされているスキル（技術・能力）があります。

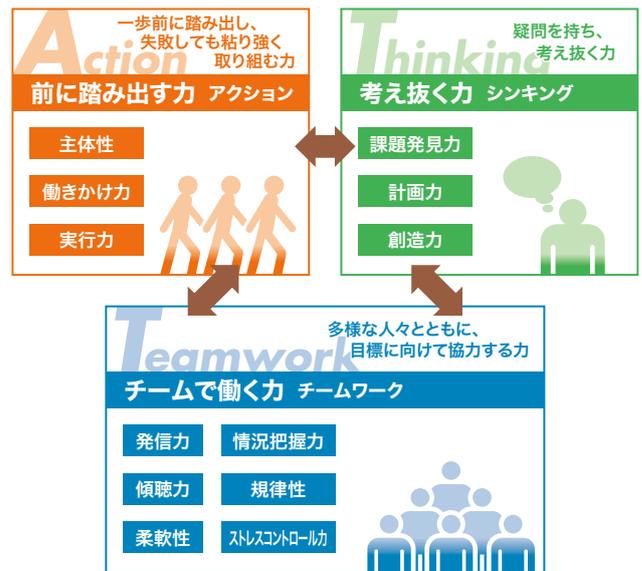
社会人基礎力

「社会人基礎力」とは「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、2006年より経済産業省が提唱しています。「基礎学力」「専門知識」に加え、思考力や人間関係に対応できる力など、多様化が進む社会に出たときに、実践的に役立つスキルを意識的に育成していくことが今まで以上に重視されています。9割以上の企業が新卒採用や人材育成において「社会人基礎力」※24を重視しています。

また同時に、思いやり・公共心・倫理観・基礎的なマナー・身の回りのことを自分でしっかりやる等の「人間性・基礎的な生活習慣」を意識的に築くことが求められています。これらの社会関係を築くうえで求められる能力は、学校教育や塾だけでは十分でなく、社会教育のようなノンフォーマル教育（注4）を通して多くが育まれます。

（注4）ユネスコの定義では、教育をフォーマル教育【学校教育】、インフォーマル教育【民間教育】、ノンフォーマル教育【学校外教育】の3つのタイプに定義分けしている。ノンフォーマル教育は、教育・価値システムの促進をおこない自治を教えるものと位置づけられている。

社会人基礎力とは… 3つの能力 / 12の要素

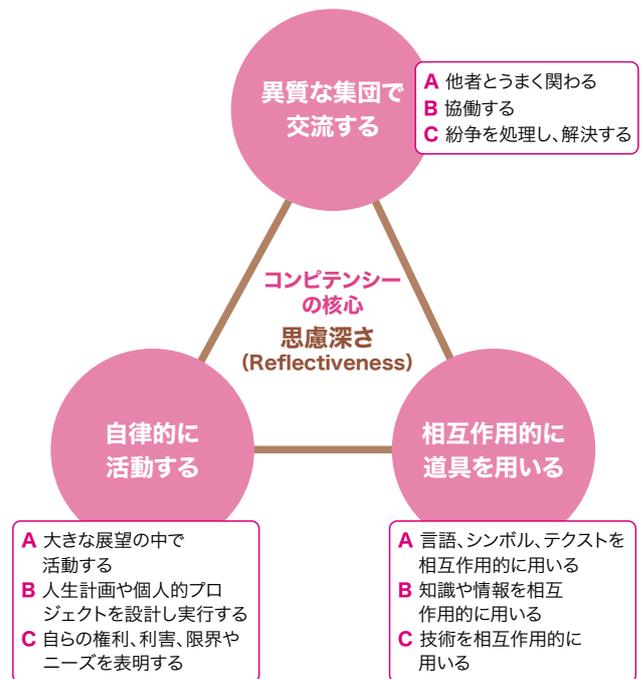


（出典）経済産業省、社会人基礎力

3つのキー・コンピテンシー（能力）

これまでになかった「変化」「複雑性」「相互依存」という特徴ある世界への対応として、国際的にも新たな3つの能力が重要視されています。この枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性です。「深く考えること」には、目の状況に対して特定の方法を当てはめるだけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え、行動する力※25が含まれています。

これからの子どもたちが生きていく社会は、今までとはまるで違うものです。技術革新は絶え間なく続き、世界のさまざまな人たちが仲間であり競争相手ともなり、複雑化する社会問題は人ごとではなくなります。予測のできない社会で、子どもたちが幸せに生きていくためには、高い問題解決能力や、不確実な未来に柔軟に対応して生きていく力が必要です。全世界において、現在、政府も教育現場も、このような能力を子どもたちにつけることに注力しています。私たち大人はそれを理解し、積極的にこの力を体得できるようにする努力が必要です。



（出典）国立教育政策研究所
「キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究」
（平成19～21年度）

リーダーシップ

多様化、複雑化する社会の中で現在もっとも声高に求められているのが、混とんとする時代を担う、リーダーの存在です。特に昨今、世界で発言できる日本人女性の育成＝リーダーが求められており、女性リーダーの育成を目指す女子大

も増えつつあります。

「リーダーシップ」があらわす意味は、社会や時代によって変わってきました。

リーダーシップの変遷

リーダーが“なに”をすべきかではなく、 リーダーが“どう”動いたか

1960～70年代のリーダーシップ理論は“リーダーがなにをしたか”、特に、どのような“行動”をとったかといった問題に関心を向けていました。従って、リーダーシップ開発も、ある特定の行動ができるよう教え込むことにばかり特化していました。しかし、この十年間は、リーダーと呼ばれる人びとが“どう”動いたかという問題のほうにより重きを置かれるようになってきました。たとえば“道徳的に正しい”リーダーシップや“賢明な”リーダーシップ、“政治的な問題に気配りができる”リーダーシップへの関心が高まってきたのです。これは、リーダーの行動において価値観が中心的な役割を占めるようになったことの現れです。また、そういった価値観を意識して活動できるリーダーを育てるような開発プログラムでなければならない、ということに他なりません。

リーダー個人に目を向けるのではなく、
チーム全体で協力して、構成員一人ひとりが能力を
出し合えるようなリーダーシップに着目するようになった

“分散型リーダーシップ”という考え方があります。これは、タスクを遂行するために必要な専門的技術や知識をもった複数の人物がそれぞれ、自分の得意とする分野において、指導的役割をリレー形式で果たしていくというものです。重要なのは、リーダーシップを発揮するのが一人だけではないという点です。タスクを遂行するためなら、リーダーはその立場に固執せず、降りるべきときは降り、フォロワー（リーダーに付き従ってきた人）でも、必要なときにはリーダーシップを取る立場に立たなければならないのです。そのためには、あるタスクを遂行するグループの構成員各自がもっている固有の特性や才能にきちんと目を配り、敏感に反応することが必要です。また、リーダーの側には、フォロワーが一歩踏みだして指導的地位に立てるような度量の大きさを持つことが求められます。

(ドナ・ラドキン博士、Centre for Executive Learning and Leadership
クランフィールド大学ビジネススクール)

(出典) World Association of Girl Guides and Girl Scouts WAGGGS Leadership Support Resource Material “Exploring Your Leadership”, 2010

シェアード・リーダーシップ

ガールスカウトでは「シェアード・リーダーシップ」という責任共有型のリーダーシップを取り入れています。独りよがりのリーダーシップではなく、チームの意見を聞き反映し、一人に責任を負わせるのではなく、チームメンバーも必要に応じてリーダーシップをとることがあります。

たくさんの課題や機会を持つ、非常に複雑なこの世界で、あらゆる人を受け入れ、みんなが責任を持つように力をつけることを目的としています。リーダーシップは特定の個人のものではなく、誰にでも、どこにでも必要で、学んで身につけることができ、分担・共有することが可能です。個々の特性を生かせるだけでなく、みんなが成長でき、目の前の課題に対しての真剣度を共有し、課題解決のスピードが速いものです。そして、自分の人生の、いつでも、どんな場面にも向き合える力を育みます。

世界を変えるのは、 女性と「女性のように考える」男性？

全世界13カ国6万4000人を対象におこなった調査で、現在リーダーに求められている資質のほとんどが、一般には「女性的」とされる資質であることが明らかになりました。世界で成功している起業家、リーダーが示す特徴の多くは「誠実」「利他的」「共感力がある」「表現力豊か」「忍耐強い」など、一般に「女性的」といわれる資質だそうです。また、この調査では「男性がもっと女性のような発想をしたら、世界は好ましい方向に代わるだろう」という意見に、世界平均の63%を上回り、日本人男性の79%が賛成と答えています。男性対女性という対立の構図ではなく、優れた資質を取り入れたリーダーシップが提唱^{*26}されています。

Break Glass Ceiling

少女・女性にとっての壁

TED^(注5)において「なぜ女性リーダーは少ないのか」というプレゼンテーションで全世界の女性に大きな影響を与えたフェイスブックCOOのシェリル・サンドバーグ氏が話題の書籍『LEAN IN』^{※7}の中で、女性が人生を切り開くには「多くの壁が存在する」と語っています。

(注5) TED (Technology, Entertainment, Design) : 米国でおこなわれる世界的な講演会

自分の実績を主張することは、より多くの成功をたぐり寄せることにつながる。「こいつはできる」と思わせることが昇進や抜擢のカギとなるのだから。男性の場合には、傲慢にならない限り、自分の業績を述べ立てても不快感を与えずに済む。だが、女性がそれをしたら、社会でも職場でも代償を払わされることになるだろう。実際、女性が面接で「自分はこれこれに抜擢された」とか、「自分にはこういう実績がある」などという、あまりよい印象を与えないという。(P.64)

子ども時代に刷り込まれた男女のステレオタイプは、生活の様々な場面で強化され、ついには自己実現的な予言と化す。ほとんどの組織でトップの座に就くのは男だとなれば、女にはそれは期待されなくなるし、従って女がそれを目指さない理由の一つになる。報酬もそうだ。男のほうが一般に女より稼ぐとなれば、人々は女の稼ぎが少ないのを当たり前と思ひ、従って女の稼ぎは少なくなる。(P.34)

ごく小さいうちから、男の子は率先して責任をひき受け、自分の意見をはっきり言うよう促される。先生は男の子によく話しかけるし、よく質問したり、指したりする。男の子のほうも先生によく話しかけ、先生もよく耳を傾ける。女の子が同じようにすると、先生は「ちゃんとルールを守って、手を挙げ、指されてから話さない」と叱ることが多い。(P.32)

男には仕事に対して野心を持つことが期待されるが、女の場合には選択肢の一つに過ぎず、それどころか好ましくないとさえすることも多い。「彼女は野心家だ」というのは、全然ほめ言葉ではないのだ。ものすごく積極的で強烈に頑張り屋の女性は、社会的なふるまいを定めた暗黙のルールに違反しているといっても言い過ぎではない。男は野心的でエネルギッシュで上昇志向であることが称賛の対象になるが、女がそうだと社会で損をすることも少なくない。(P.27)

さまざまな職業について実施された多数の調査の結果、女性は自分の仕事の成果を実際より低く見積もる傾向があるのに対し、男性は高く見積もる傾向があることが判明している。たとえば、外科手術の実習をおこなった学生に自己評価させると、女子学生は男子より低い点数をつける。しかし、教官による評価では、女子が男子より高得点になるという。(P.44)

Lack of Self-Confidence

少女自身が持つ内なる壁

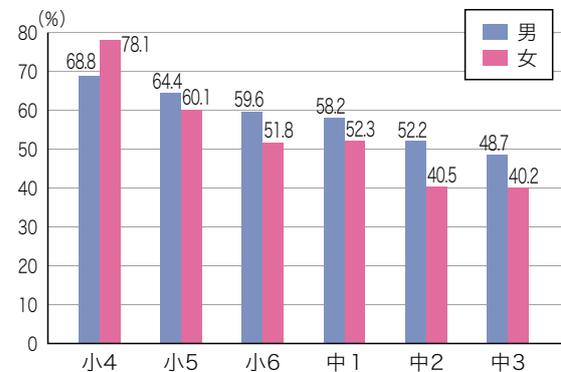
日本の少女

2011年に日米中韓の高校生計約8,000人に実施した調査^{※27}で、「自分はダメな人間だと思うことがある」との質問に「よくあてはまる」「まああてはまる」と答えた割合は、日本では83.7%でした。これは1980年の調査の約3倍にあたります。「自分は価値のある人間だ」という質問に「あてはまる」とした割合も、日本が39.7%で4カ国中最低と、世界の中で日本の若者全体の自己肯定感の低さが際立ちました。

また、自己肯定感の男女別学年推移をみると、小学校4年生を境に、女子生徒の自己肯定感が下がります。学年が上がるとつれ自己肯定感が下がる傾向がみられます。

思春期に下がるといわれている自己肯定感。少女には少女特有の理由があるようです。

自己肯定感 男女別学年推移

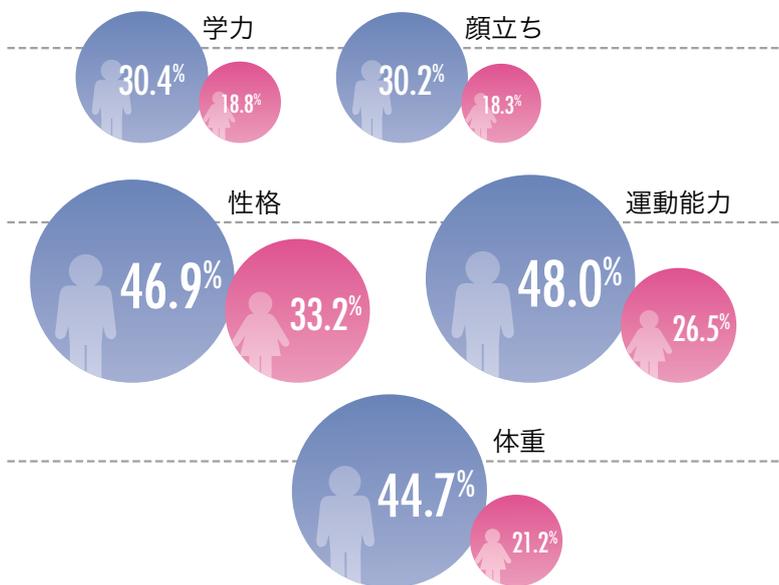


(調査) 久芳美恵子 2005年

自己肯定感とは

自分には価値がある、必要とされている、自分に自信が持てるなど、自分を肯定的に思う「ところ」を指す。困難に負けず、いきいきと幸せな個人として生きていくには誰にも必要不可欠な要素。

自分に満足しているか 男女別



(出典) ベネッセ教育総合研究所 モノグラフ中学生の世界2002年度 vol.73

中学生に対する「自分に満足しているか」^{※28}という調査においても、男女間の差が大きく、女子生徒はすべての分野において満足度は低いことが分かります。

自分の思うように人生を選択して、なりたい自分になっていくためには、外側や内側からくる壁を破っていかなければなりません。

次ページでは、アメリカとイギリスで少女たちにおこった調査を紹介します。

アメリカの少女の声 (ガールスカウトアメリカ連盟の調査)

どんなふうに見えるか、
外見が一番大切なこと



ファッション業界
やメディアから瘦
せていなければな
らないというプレッ
シャーを感じる



モデルのようにな
りたいと考えてい
る



ファッションがと
ても重要であると
考えている

(出典) Beauty Redefined:
Girls and Body Image Survey, 2010

大人たちは、私のために
時間を割いてくれない



学校生活では、成功して
いる女性と触れ合う機会
がまったくない

(出典) ToGetHerThere:
Girl's Insights on Leadership, 2012

リーダーシップをとるといことは
自分には関係ない



女性は企業や団体に活躍できると信じて
いるにもかかわらず、企業や団体の幹部
にはほとんどなれないと考えている

(出典) ToGetHerThere:
Girl's Insights on Leadership, 2012

13-17歳



リーダーシップを取
ろうとしたときに同年
代の仲間や級友にけな
された



笑われる、怒る人が
いる、威張りたがりだ
と思われ、嫌われるの
が嫌で、リーダーシ
ップを取りたくない



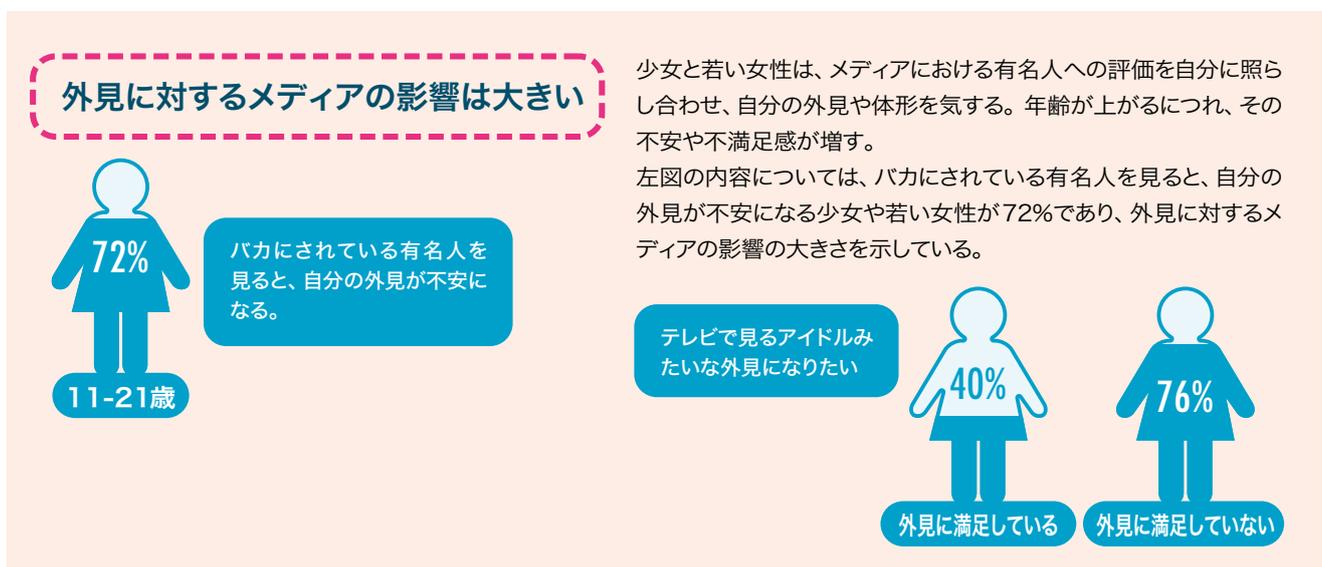
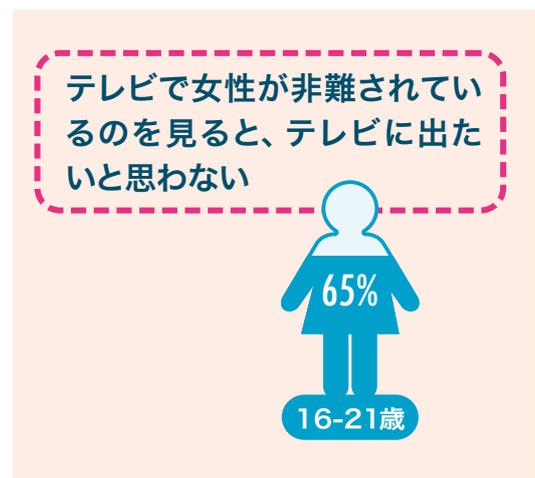
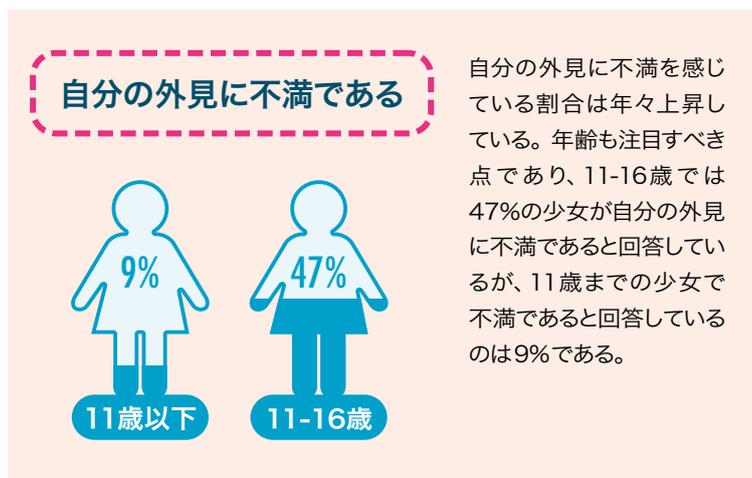
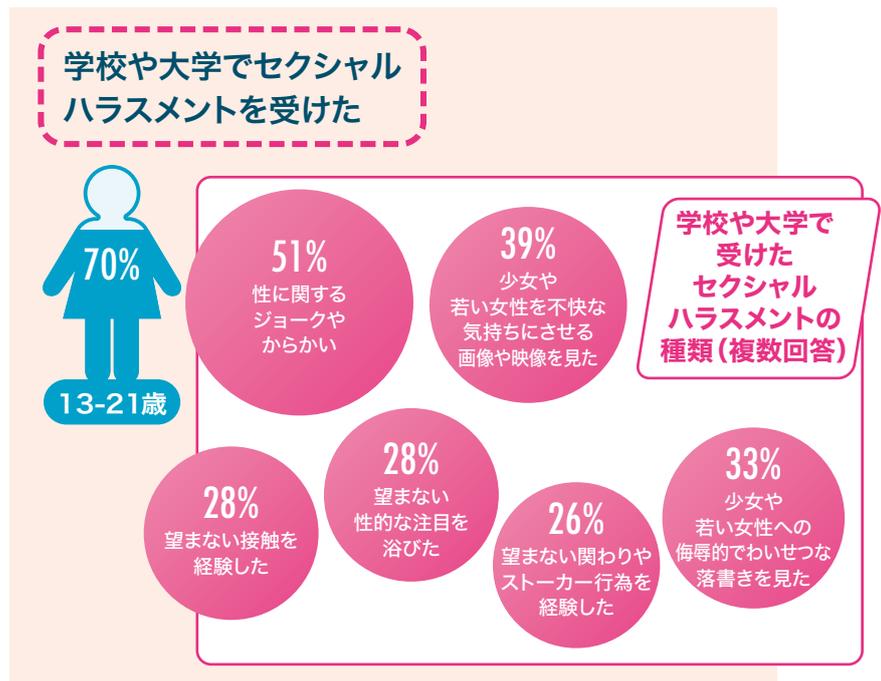
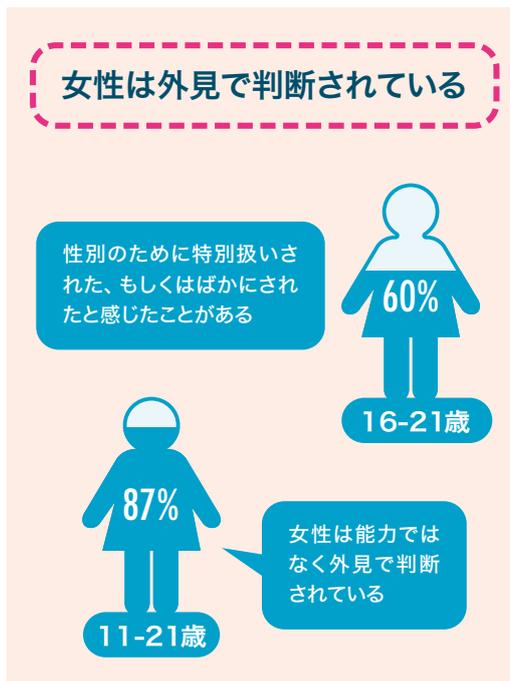
リーダーシップをと
る役割を得るには、男
の子よりも努力しなけ
ばならない



わたしはリーダーにな
る素質を持っていると
思う

(出典) Change it Up! What Girls Say About Leadership, 2008

イギリスの少女の声 (2013年 ガールガイドイギリス連盟の調査)



(出典) Girlguiding UK, what girls say about... Equality for girls, 2013



21世紀の女性を育てる

昭和女子大学
学長
坂東 眞理子氏

これからの女性は、人生を主体的に捉えてデザインしていかなければならないと思います。世界に通用する女性。そのためには健康であること、知的好奇心に溢れていること、魅力的であることが大事だと思います。

しかし、男の子には頑張っていい学校に進学していい仕事に就いてほしいと願い、女の子には嫌いな勉強は無理にさせなくても伸び伸び育てばいいと考える家庭や保護者が多いのが現実です。本当に残念なことだと思っていましたが、重圧に負けて気弱になっている男の子を見ると、女の子への期待が軽いのも悪くはないと思えてきます。昔は「女の子はお嫁に行くのだから家の手伝いをしなさい」「そんなことをしているとお嫁に行けなくなる」とプレッシャーが強かったのですが、今はそれも少なくなっています。とてもいいことだと思います。もちろん重圧に押しつぶされずにしっかり歩いている男の子もいます。そして、女の子の場合は抑えられないのはプラスになりますが、将来何を目標に何をやるのかがはっきりしていないのは、かえってとても弱いのではと感じています。

女の子には自分の好きなことをやれるアドバンテージはありますが、世のため人のために働きなさい、権利を主張する前にしっかり義務を果たしなさいという指導が弱いので、伸び伸びでなく野放図になっています。だから、目標を与えなければならない。以前なら「良妻賢母」が目標だったかもしれませんが、これからの女の子にはどのような目標を与えるのがよいのでしょうか。

「医者になりなさい」「国会議員になりなさい」というのでは男の子と同じですし、「もっとこの世の中をよくするためにあなたに何ができるか、その力を世の中のため人のために使いなさい」と、社会とのかかわりを考えさせることができません。厳しい競争に負けてしまうとと言われるかもしれませんが、男性と同じでは20世紀後半的なリーダーを育てることしかできません。人との競争に勝つリーダーではなく「みんなが協力してやり遂げる」「見過ごされていたさまざまな問題に目を向ける」ことが大切です。上から下に向かって「俺についてこい!」と旗を振るリーダーではなく、共感できる正義感を持てるリーダーを社会は必要としているのではないのでしょうか。

公益社団法人ガールスカウト日本連盟 主催
女の子を育てるフォーラム 基調講演
「女性グローバル人材を育てるには」より

2013年3月24日実施
国立オリンピック記念青少年総合センター

参考資料

- ※1 厚生労働省 「若者の意識に関する調査」 2013年3月
- ※2 内閣府 「男女参画社会に関する世論調査」 平成24年10月
- ※3 世界経済フォーラム Global Gender Gap Report (『世界男女格差レポート』)にて公表される各国の男女間の不均衡を示す指標。
- ※4 内閣府「男女共同参画白書」平成25年度版
- ※5 経済協力開発機構「雇用アウトLOOK」 2013年
- ※6 国立社会保障・人口問題研究所の分析結果 2011年
- ※7 シェリル・サンドバーグ『LEAN IN (リーン・イン) 女性、仕事、リーダーへの意欲』日本経済新聞出版社 2013年
- ※8 河合薫 「なでしこ報道で露呈した“ニッポン”の未熟な女性観 男性社会の自覚なき“刃”が女性を働きにくくする」日経ビジネスオンライン 2011年7月28日
- ※9 Brooks Peck, "Japan women's soccer team forced to fly lower class than men's team", Fourth-Place Medal, July 18, 2012
- ※10 Amanda Duberman 「女性が長いこと参加できなかった、冬季オリンピックの競技【ソチオリンピック】」 The Huffington Post 2013年2月14日
- ※11 総務省 「情報流通センサス報告書」 平成20年
- ※12 Markezine 20代のスマホ普及率は60%越え 2013年2月22日
- ※13 ドン・タプスコット『デジタルネイティブが世界を変える』翔泳社 2009年
- ※14 経済産業省 女性起業家実態調査 平成22年度
- ※15 博報堂生活総合研究所 小学4年生～中学2年生を対象にした「子ども調査」 2013年
- ※16 内閣府 国民生活選好度調査 平成23年
- ※17 OECD 図表でみる教育2013年
- ※18 ベネッセ教育総合研究所 モノグラフ中学生の世界2002年度 vol.73 「元気な女の子」と「ほどほど志向の男の子」 P.35
- ※19 ベネッセ教育総合研究所 モノグラフ中学生の世界2002年度 vol.73 「元気な女の子」と「ほどほど志向の男の子」 P.23
- ※20 OECD (2009) , "Equally prepared for life? How 15-year-old boys and girls perform in school"
- ※21 友野清文『私学における女子教育の研究—教育における「ジェンダー問題」の再考—』日本私学教育研究所 紀要 財団法人日本私学教育研究所 2008年
- ※22 文部科学省 「学校基本調査」平成25年
- ※23 川畑智子「イギリス：女子のみの学級の効果」『教育』2012年5月号、P.114-115
- ※24 経済産業省 「社会人基礎力に関する緊急調査」 平成18年
- ※25 文部科学省 OECDにおける「キー・コンピテンシー」について
- ※26 ジョン・ガーズマ、マイケル・ダントニオ「女神的リーダーシップ 世界を変えるのは、女性と「女性のように考える」男性である」 プレジデント社 2013年
- ※27 財団法人日本青少年研究所 「高校生の心と体の健康に関する調査」 2011年
- ※28 ベネッセ教育総合研究所 モノグラフ中学生の世界2002年度 vol.73 「元気な女の子」と「ほどほど志向の男の子」 P.25

第2章

ガールスカウト 日本連盟の 調査

調査の目的

男女共同参画社会の進展とともに、男女が同じ環境で教育を受け、活動をおこなう機会が増える中、ガールスカウトは「女性だけで活動する理由」を問われることがあります。また、ガールスカウトの教育成果についても、会員それぞれは体感していることがあっても、それを数字で伝えることが求められる昨今です。海外のガールスカウトには、同種の調査をおこなっている連盟がありますが、日本では初めての調査となりました。

今回の調査では、「男女別で活動をおこなうと、女子の**自立心**や**責任感**などが育つ。また、女性だけであると**チャンス**（選択肢が狭まること）が妨げられる）が与えられ、**さまざまな役割が体験できる**ことや、同性だけの環境そのものが有効に働く。」ということを立てようと試みました。

ガールスカウトの教育成果を検証するために、ガールスカウト活動に参加する中学生および高校生年代の女子と、一般の中学生および高校生女子に対して、アンケート形式で意識調査を実施しました。また、これと並行して、ガールスカウト活動経験のある20代の女性に対し、その経験を俯瞰するために聞き取り調査をおこないました。



調査概要

調査対象

- 全国のガールスカウト活動に参加する
 - 中学生女子 323人
 - 高校生女子 262人
- 全国の男女共学校に通う
 - 中学生女子 237人（青少年活動への参加者を除く）
 - 高校生女子 112人
- ◆なお、ガールスカウト経験のある20代女性、大学生（男女）、全国の男女共学校に通う中学生男子（287人）高校生男子（38人）からの回答も参考資料とした。

調査方法

アンケート用紙記入（一部オンラインでの回答）およびグループインタビュー

調査時期

2012年7月～2013年2月
（予備調査を2011年度実施）

アンケート用紙

全39問中▶

- ①4点法 … 33問
- ②記述付 … ①の33問のうち、3問
- ③三者択一 … 6問

ガールスカウト日本連盟では、「ガールスカウト」を経験することで、少女たちにどのような力がつくのかを明確にするために調査をおこないました。そして、調査結果から、ガールスカウトでは下記の特徴的な力が育まれていることがわかりました。

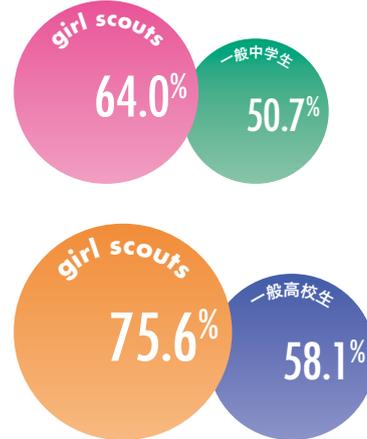
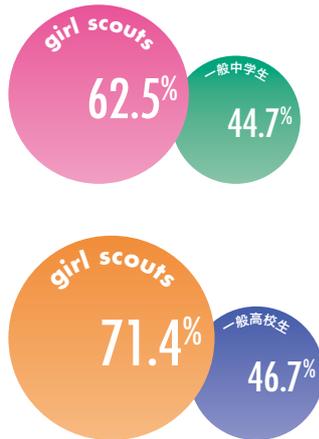
◆
ガールスカウト活動に参加すると、1. 積極的に人と関わる力、2. 仲間と成し遂げる力、3. 挑戦しようとする力が身につくことが明らかになりました。ガールスカウトは〈自己肯定感〉が高いことは過去の調査結果でも明らかでしたが、今回の調査でも同様の結果がでました。また、ガールスカウトたちは、〈ジェンダーに偏らない考え方や世界観〉が身につけているということがわかりました。

こういった成果をもたらすための「条件」として、【体験重視】【グループ活動】【異年齢との関わり】、そして【女性だけの環境】という、ガールスカウト教育の特徴が大きく関係していると言えます。

■ ガールスカウト(中学生) ■ 一般中学生
■ ガールスカウト(高校生) ■ 一般高校生
「とてもあてはまる」「あてはまる」の合計

初めて会った人とも
打ち解けられるよう
積極的に関わることができる

自分の意見が言える



誰かが一人でいると、その子に声をかけて仲間に入れてあげたい、入れてあげなくては、と思う。

もともと極度の人見知りだったのが、知らない人に自ら話しかけられるようになったり、大勢の人の前でもはっきりと話せるようになった。

学校では同じ学年の子といることが多いけれど、ガールスカウトで幅広い年代の人たちと関わる中で、年齢に応じた対応をしたり、気配りができるようになった。

(ガールスカウトの声)

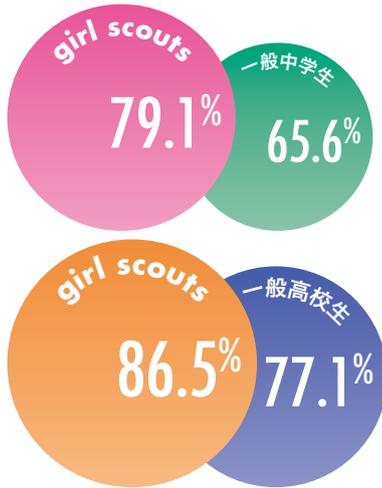
ガールスカウトは、「初めて出会う人とも積極的に関わる」という力を十分に身につけていると言えます。ガールスカウトでは小規模集団で、いろいろな年齢・立場の人と継続的に関わり合うなかで、人とコミュニケーションをとる方法を自然と学んでいきます。話し合い活動などを通じて、自分の意見を求められる機会も多く、発表を積み重ねる中で、人前で話すことへの抵抗感がなくなっていくようです。

ガールスカウト活動で
培われる3つの力

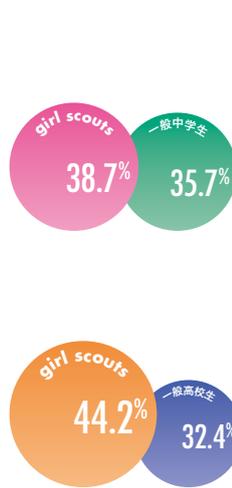
2 仲間と成し遂げる力

■ ガールスカウト(中学生) ■ 一般中学生
■ ガールスカウト(高校生) ■ 一般高校生
「とてもあてはまる」「あてはまる」の合計

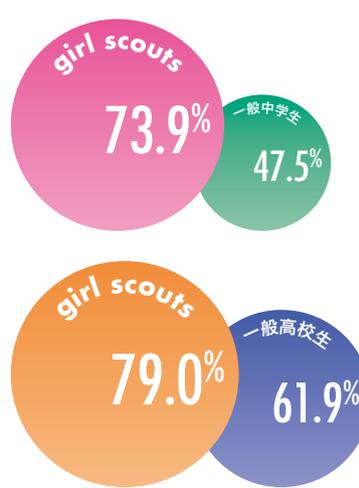
協力して
何かをやり遂げた
経験がある



リーダーとして
グループをまとめる
ことができる



社会に役立つ
活動ができる



私はガールスカウトで、責任感がついた。グループで活動する中で、いい意味での連帯責任を取ることによって、まわりの人を意識してみられるようになった。

発言力、行動力はガールスカウトでついてきた力だと思う。ガールスカウトでは自分たちの考えたことが実践されていく実感を持つことができ、社会に出たときに役立った。

さまざまな場面で協調性をもって、もめないようにまとめていける。

長になる機会がある。人の上に立って行動する機会があり、外に行っても不安にならない基礎が身についた。

(ガールスカウトの声)

ガールスカウトのプログラムでは、自分が興味関心があることを「プロジェクト」という形で企画・実践していくことを奨励しています。また、社会に役立つ活動を取り入れています。人に役立つためには、まず自分自身が様々な力を身につけることが必要であり、それは自身の可能性を伸ばすことにもつながります。

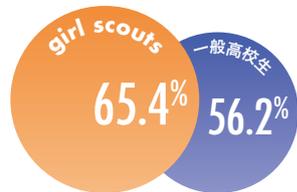
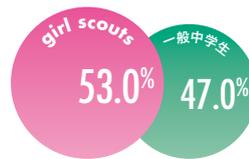
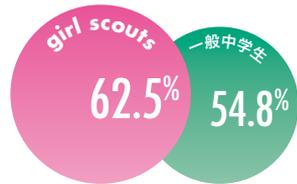
ガールスカウトの重んじるリーダーシップの形を、「シェアードリーダーシップ」と呼びます。独裁的なボスタイプではなく、女性的価値(集団的協同・協調等)を活かした、リーダーシップを共有する型です。

■ ガールスカウト(中学生) ■ 一般中学生
■ ガールスカウト(高校生) ■ 一般高校生
「とてもあてはまる」「あてはまる」の合計

やりたいと
思ったことは
何でも挑戦できる

自分で考えて
行動できる

困ったことが起こったとき、
なんとかしようという
気持ちがある



キャンプの時に(困っても)何とかなるだろうと思った。何度も失敗して、周りの人を助けたり、逆に助けてもらったりという経験が増えていった。

ガールスカウトに来ると重い荷物も誰も運んでくれないので、何でもチャレンジしようと思う。自分のやれる範囲が広がる。

女子校に在学していても、ガールスカウトの子はリーダーシップをとって積極的にチャレンジしようとしている。

何とかしなきゃと思う。誰かがやってくれるのではない。

人にやってもらう前に、自分でやってみようと思うようになった。

学校は人数が多いので、最初の意見に乗ってしまう。ガールスカウトでは、自分たちで全部計画して最後まで実行する。

(ガールスカウトの声)

ガールスカウトでは活動の中で、取り組む課題を自分で見つけ、まずはやってみるよう機会を与えています。そこで、成功だけでなく、失敗を含めた経験を長年に渡って多く積んでいるため、自分で考えて行動する思考が自然と培われていきます。「自分で考え行動できる」「やりたいと思ったことに挑戦できる」気持ちはこのような経験から育まれていと推察できます。困ったときには何度も挑戦し、友達と協力しながら、知恵と技を出し合って、解決する方法を探っていくようです。



経験の豊富さ

ガールスカウトと一般中高校生の違いは、経験内容についても表れています。

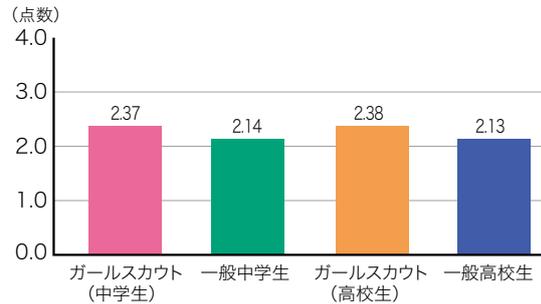
例えば、「協力して何かをやり遂げた場面」や「自分で考え行動した場面」などの例を自由記述で尋ねると、一般中高校生のほとんどは、文化祭や体育祭のような学校行事や部活動が9割以上を占めます。一方、ガールスカウトの場合は、学校行事での場面の回答は半数程度ですが、50%以上がガールスカウトでの多様な活動場面、たとえば野外料理やテントを立てるなどのキャンプ活動、話し合いの活動で意見をまとめる、実行委員会などで活動を計画する、地域社会での役立ちなど、実に多様な活動をあげています。

またそのなかで、いろいろな役割をしていることが浮き彫りになり、住んでいる地域を越え、活動場所の広がりもあります。加えて、そこにいろいろな人が関わっています。少人数でおこなうことから、その密度は濃く、個人の関わりは深いです。このように、ガールスカウト経験者は、一般女子に比べて、豊かな「経験資本」をもっていることが明らかになりました。

高度に発達した情報社会では、「直接体験」の機会が少なくなりました。現代社会は、インターネットなどを通じて「仮想体験」ができる世の中です。ここでは、他者や事ながら直接かわり、直接経験を獲得することが、今まで以上に大きな価値をもたらす社会になっています。

他者と関わりながら、社会的に意味があるような経験は誰でもができることではなく、「経験」は貴重なものであり、「資源」であると考えられています。

自己肯定感



中学生・高校生ともに、ガールスカウトは、一般女子に比べて、自己肯定感が有意に高いと認められます (4点満点中)。ガールスカウトの過去の調査でも同様の結果がでています。

自己肯定感が高い子どもは、「自分は大切な人間だ」と自分の存在そのままを認めることができ、失敗があったり、ストレスを感じるがあっても、それらをうまく乗り越えていく力を身につけています。また、自分を認められる子どもは、他者を認める力も身につけています。

一般的に思春期になると、特に女子の自己肯定感は低下する傾向にあります。日本の子どもの自己肯定感の低さは課題にもなっており、いじめ問題とも密接な関係があると言われています。その中で、ガールスカウト活動と自己肯定感の関連は注目に値します。

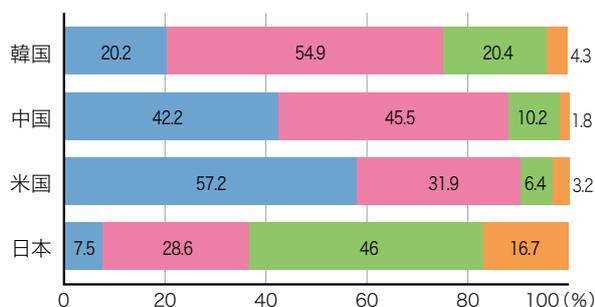
私の部活は女子だけがガールスカウトとは違う。ガールスカウトは一人ひとりが核を持っている。

ガールスカウトの人は自分の強さを知っている。

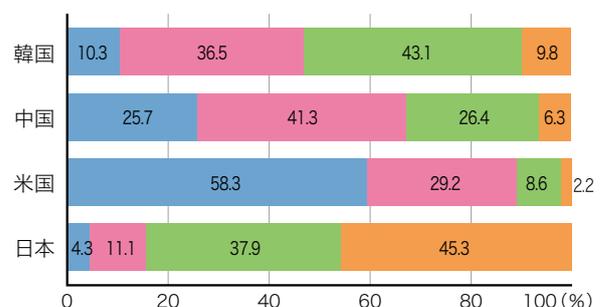
(ガールスカウトの声)

世界の高校生に対するアンケート

■ 私は価値のある人間だと思う

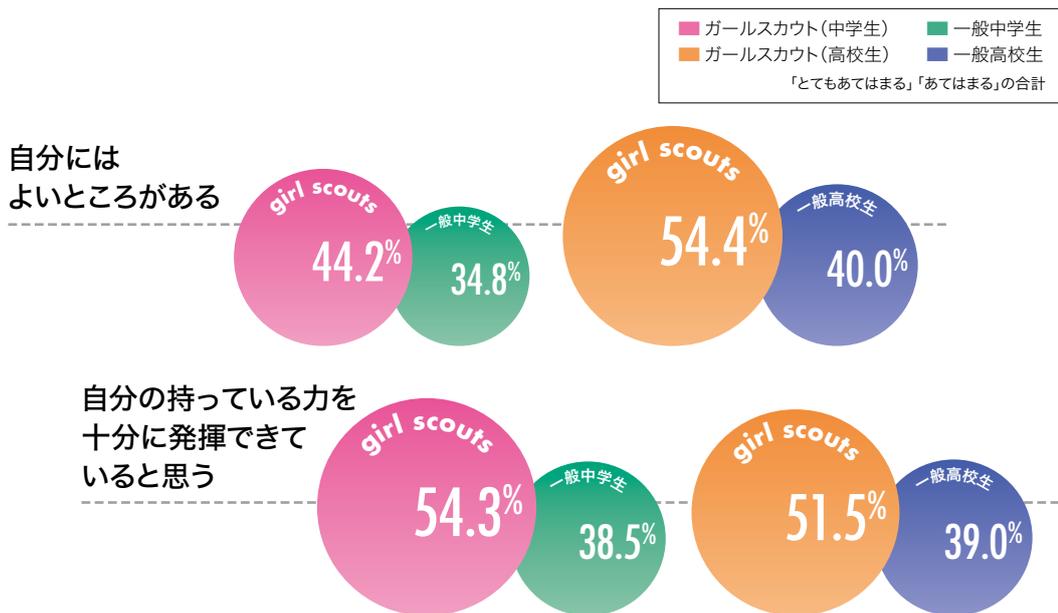


■ 自分が優秀だと思う



■ 全くそうだ ■ まあそうだ ■ あまりそうではない ■ 全然そうではない

(出典) 財団法人 一ツ橋文芸教育振興協会、財団法人 日本青少年研究所 「高校生と心の健康に関する調査」 2011年3月



「自分にはよいところがある」「持っている力を発揮できている」という少女が、一般に比べてガールスカウトには多いことが認められます。多くの体験の機会、大人とのかかわりを通して、自分を発見する、活かす場面が多くあるからだと考えられます。

異年齢集団では、年上の人姿に将来の自分を重ね、「かっこいい」「あになりたい」と憧れを抱き、努力をすると同時に、「自分の姿は年下の仲間に影響するのだ」という自覚と、自分を律する心を養う役割があります。

今まで先輩たちを見てきた経験から、自分もリーダーになって先輩のように、よいリーダーになりたいと思っている。

海外にいったレンジャースカウト(高校生)の印象が強かった。自分がレンジャーになったときに小さかったときのことを思い出して、自分もそうなりたと思った。

自分がジュニア(小学校高学年)の時にレンジャー(高校生)の人をいいなと思っていた。リーダーになり、スカウトが自分の行動をいいな思ってくれているので、自分がロールモデルになれるといいなと思う。

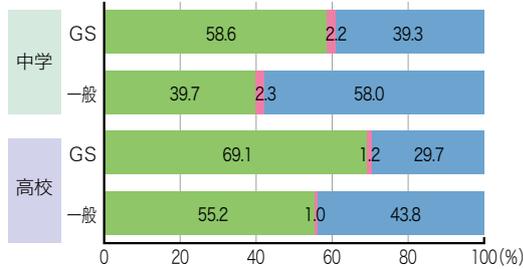
(ガールスカウトの声)

一般に女子は自分に対する満足度が低いという調査結果があります。今回の調査でも、「容姿(顔やスタイル)に満足している」という割合は、ガールスカウト高校生17.7%、一般高校生9.5%、ガールスカウト中学生22.1%、一般中学生13.1%でした。若干ガールスカウトの数字が高いものの、大半の少女が「不満である」と答えていることには変わりがなく、この数字にある背景を調査する必要があります。

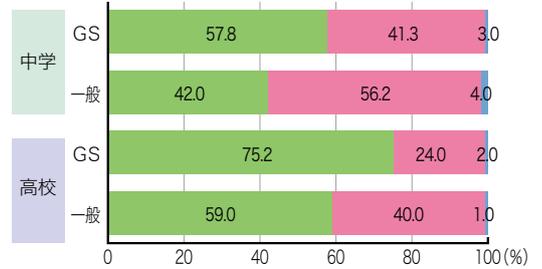
ジェンダーに偏らない世界観

男女別役割意識の違い

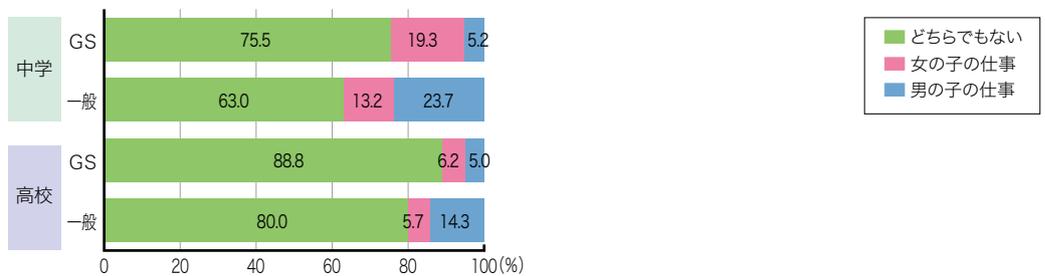
■ 荷物を運ぶ



■ 料理をする



■ リーダーになる



■ どちらでもない
■ 女の子の仕事
■ 男の子の仕事

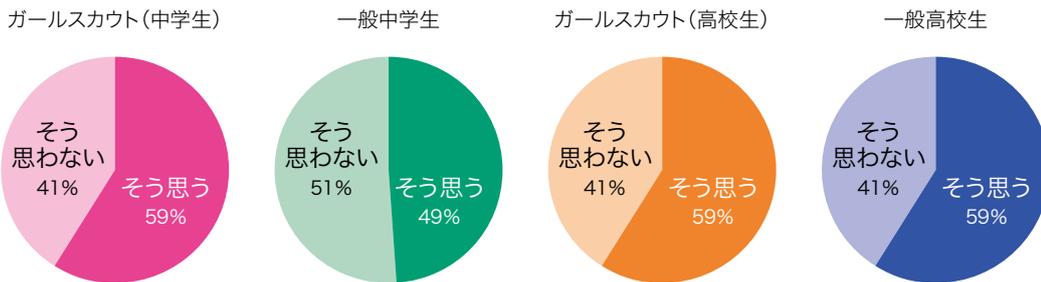
いくつかの役割を例にあげ、「男女どちらの仕事だと思うか」と質問すると、ガールスカウトは多くの役割に「どちらの仕事でもない」と答える割合が、一般女子に比べ有意に高くなりました。これは、すべての活動を女性だけで分担しておこなう環境と経験に起因しています。そしてこの力は、将来にわたっても、様々な役割に挑戦し、主体的に責任を果たそうとする基礎となります。「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分担の固定観念に影響されず、いろいろな役割を体験し、能力を伸ばす機会がガールスカウト活動の中には存在します。



異性がない環境の意義

■異性がない(同性だけ)という環境だと、いろんなことに挑戦できる

そう思う＝「とてもあてはまる」「あてはまる」の合計
 そう思わない＝「あてはまらない」「すこしあてはまらない」の合計



ガールスカウト経験の有無に関わらず、半数近い少女が「異性がない環境であると、いろいろなことに挑戦できる」と答えています。これは、少女たちは、異性と共にいる環境に何か窮屈なものを感じている、ということを表しています。そして高校生になるとその割合が増えるのは、自己肯定感の低迷と関係があるかもしれません。ガールスカウト経験者は、通常学校生活を含めて、女性だけの環境・男女混合の環境双方で活動した経験を持っていることから、それらを比較して考えることができます。

興味深いことに、「異性がない環境だといろんなことに挑戦できる」という男子の割合は、全体の63%です。何かに閉塞感を感じている男の子は実は多くいるのかもしれません。

女の子しかいないから自分たちでできる。

女子だけでもこのくらいのことができるとわかる。

女子だけだと本音を出しやすい。しゃべりやすい。自分を飾らなくていい。

共学だと相手を見て控えめになってしまう。

男性がいると「良く見せたい」と、自信のないことから逃げようと思うが、女子だけだと何とか解決しよう思う。

(大学の)ゼミでは、女性の意見が男性の意見に消されてしまうことがある。自分が発言することによって、「他の女の人も自主的に発言できるようになってきた」、と先生に言われた。ガールスカウトのギャザリング(話し合い活動)などで経験してきたことが生きているな、と実感できた。

(ガールスカウトの声)

ガールスカウトでなぜ、このような力が育つのか？

そこには、女子だけで活動する意義が見えてきます。

“女の子が主役になれる” —18歳、ガールスカウトのこぼ

「女子でも男子のことができること！」

「普段は男子がやっていることに取り組むことができる」

ガールスカウトたちに、女子だけで活動することの利点について聞いたところ、87.2%の少女が回答し、複数回答をした少女も多くいました。

ガールスカウトの中学生・高校生は、「女子だけで活動する意味」を次のようにとらえています。

1 安心感・共感がある

自由に何でも話ができる気持ちになる、意見が言いやすい

2 チャンスがある・チャレンジできる

挑戦できる雰囲気がある、自分たちだけで、何でもやる機会が多くある

3 仲間やロールモデルの存在

同性の仲間やロールモデルが身近に存在する

1 安心感・共感がある

個人のあらゆる可能性を伸ばす上で、学校、家庭や地域社会などが安心感を与える環境であることは非常に大切です。女子のみの環境では、「安心できる」「落ち着ける」「素の自分でいられる」という意見が全体の半数以上です。これは、少女たちがそれだけ多くの不安や何らかの見えないバリアに囲まれていることを表しています。安心できる環境では、自分を自由に表現でき、少女に自信を与えます。特に高校生の半数は女子のみの環境に安心感を求めています。

女子だけだから、自由に何でも話ができる気持ちになる

男子の目を気にせずに活動できる

男の子がいたと思ったことが言えない（本音が出せる）

悩んだり困ったりしたときに遠慮なく相談できる

（ガールスカウトの声）

2 チャンスがある・チャレンジできる

女子のみで活動すると、男子がいる時に無意識に感じる「依存心」や「遠慮」が排除されます。女子だけの環境であると、男子の目を気にして「やりたくてもやりたいと言えない」と感じる必要がなく、「やらなくてもいい」と人任せにしたり、自分で制限を加えることがなくなり、「自分たちで何とかしよう」としたり、いろんなことにチャレンジできます。役割にしても、挑戦できる「順番」が回ってきます。今まで経験できなかったことに挑戦する機会を得て、その結果「私もできる感」を実感し、自信へとつながり、多方面に波及効果をもたらします。

男の子がいると、やらなくては成長しない仕事を押し付けてしまうので、いない方がいいと思う

女子だけの方が自分から行動できる

一人一人が何かどこかで、リーダーシップをとる機会があるから

(ガールスカウトの声)

3 仲間やロールモデルの存在

女子のみの環境には、同性の仲間がたくさんいます。特に中学生年代は仲間を求める傾向を強くもっています。そして、異年齢集団である場合、ロールモデルが身近に存在することとなります。まわりを見て「わたしもできそう」「ああやればいいんだな」というお手本を得ることができ、自らを高めていける環境がそこにあります。

同じ経験をしているから

女の子だけだからみんなのいいところを吸い取れる

ガールスカウトの先輩や仲間(女の人として)たくさんのことを教えてもらえる

(ガールスカウトの声)

日本の未来を担う女性 = 現在の少女たちに確実に力をつける

ガールスカウトたちに「ガールスカウト」を友達に勧める理由を聞くと、大多数が「全国にたくさんの友達ができる」と答えます。ガールスカウトを通して、地域を超えて友達をつくり、学校では普段できない体験活動(野外活動・話し合い活動・国際協力など)が経験できることに価値を見出しています。インターネット社会で人間関係が希薄になる中、ガールスカウトたちは、人との直接的なつながりを大切にし、豊かな経験を重ね、人のため・社会のために役立ちたいと願っています。



第3章

少女・女性の可能性を伸ばす7つの条件

少女や女性が、“自分の人生のリーダーシップ”をとり、自らの可能性を信じて、どんな状況においても挑戦していけるような力をつけるためには何が必要でしょうか。

ガールスカウトが今回おこなった調査研究をもとに、「少女・女性の可能性を伸ばす条件」として、7つのことを提案します。



少女・女性の立場についての 現状認識



私たちは、日々さまざまなことに影響を受けながら生活しています。それは、伝統的な価値観かもしれませんし、現代の社会的課題かもしれません。いずれにしても、社会の動向をよく見て、少女や女性を取り巻く環境、置かれている立場や期待されていることを知ることは、女性の可能性を最大限に伸ばすために重要なことです。



同時に、少女や女性のニーズに耳を傾け、どんなことに興味を持っているのか、どのようなことを必要としているのかを知ることが大切です。少女のもつ不安や、今後どのような力が必要とされるのかを見極めて、学習課題を洗い出すことが欠かせません。



数々の調査から、多くの人々のなかに、女性、男性それぞれの役割に対する固定観念やあり方への期待が存在することは明らかです。そして、少女少年の頃からその影響を受けていることもわかりました。また、少女も少年も、同性同士のほうがお互いの存在を意識せず、のびのびと自分自身をさらけ出せると感じる人が多いことも明らかになりました。

これらの結果を踏まえ、少女・女性の立場についての現状認識を適切におこなうことは、「少女と少年」、「女性と男性」が本当に平等の状態にあるのか、という問いを常に意識することにつながります。そして、そのことを当事者である少女・女性が正しく認識することが重要です。



2

壁を乗り越える 良質のプログラム



少女・女性のおかれている立場やニーズなどに基づいて、少女・女性の可能性を伸ばすことができるプログラムを提供することが必要です。

知らない間に「壁」や制限をつくっていないかを点検してみましょう。通常は「男子向き」とされることが多い科学・技術・工学・数学（STEM：Science, Technology, Engineering, Mathematics）の分野を積極的に取り入れることは、少女の能力を引き出し、将来の選択肢を広げることに繋がります。その際、例えば、その科学の原理が実生活での応用例を示せば、少女の興味を引きます。少女が参加したくなる工夫をしましょう。

本来、「女子向け」のプログラムは存在しない、という認識を持つことが大切です。つつい、「女の子だから」「女の子はこういうものが好きだから」といった視点で、料

理やクラフトばかりに終始し、冒険的な活動やスポーツを除外していないかを点検するように心がけましょう。

女性のライフステージに配慮したキャリア教育をおこなうことも必要です。女性は特に20代から30代にかけて、就職・結婚・出産・育児というライフイベントを多く経験します。こういった女性の現実の人生に対応できるプログラムを少女や若い女性は求めています。また、人間関係やチームワークを含む幅広いライフスキル、プレゼンテーションや経営などの職業スキルも、少女の可能性を広げる上で必要です。

少女の発達段階と、ニーズに合ったプログラムを提供することで、少女自身がプログラムに魅力を感じ、取り組むことができるでしょう。

調査によると、科学、技術、工学、数学（STEM）において女性が過小評価されている理由は以下の通りです。

- ・多くの人が科学や数学は男性的な分野であるのに対して、人文科学や芸術は女性的な分野であると思っています。このような思い込みにより少女たちの理数系への関心が低くなっています。
- ・少年のほうが少女よりも数学ができるという思い込みも少女たちのテスト結果に悪い影響を与えています。もし、先生、両親、リーダーたちなどが少女たちにSTEM教科で同じぐらいの才能があると伝えれば、少年たちと同じぐらいの成績になるでしょう。
- ・児童たちの理数系教科成績は同等であるにも関わらず、思い込みにより、少女たちは理数系を苦手と思っています。理数系教科において少女の成績は同等に良いことを強調する必要があります。
- ・理数系分野において少女たちが尊敬できる模範となる女性（ロールモデル）が多くないです。

(出典) World Association of Girl Guides and Girl Scouts, "World Thinking Day 2014 MDG 2 Activity Pack", 2014

3 学び方（体験から学ぶ）



体験学習は「おこなうことによって学ぶ」という方法です。この方法は、一人ひとりが自分のために自ら「おこなう」ことにより得られる「学び」であり、ただ受け身で聞いた観察したりすることではありません。自らおこなう「学び」とは、自分の間違いからも学習できることを意味します。本人自身の体験から得られる学びのため、より早く、より深く学習することができます。体験学習は、自主性や創造性を伸ばし、自分の可能性を試し、自信を持つことにつながります。

◆
体験学習とは、体験する活動すべてのことから学ぶ方法ですから、実社会でおこなわれているあらゆる事柄が体験できるよう、指導者はその機会を設定するように心がける必要があります。少女自身でどのような活動をするのかを選び、企画・実行し、意思決定をおこなう場を設けましょう。指導者は、少女一人ひとりを見守り、「待つ姿

勢」を心がけ、「間違っても大丈夫」、「挑戦する」、「リスクをとる」ことを奨励してください。また、問題解決にはいろいろな選択肢があることを示し、具体的な例をあげて説明するという配慮も必要です。

◆
女子は協力して学ぶことを好み、互いを情報源として取り組みます。また、1つ1つ順を追って理解しようとする傾向もあります。このように、女子が好む学習スタイルを尊重することが大切です。ただ、個人差はありますし、そのことに偏りすぎないようにしましょう。

少女たちは体験学習からさまざまな能力を身につけることができます。なかでも人生を通じて、自らを成長させるための「学び方」を身につけることが、身につけるべき最も大切な能力であり、今日の生涯学習社会においては非常に価値があることです。



4 役割体験の機会



少女・女性の可能性を伸ばすには、社会生活の中に存在する、さまざまな役割を積極的に体験する機会を充実させましょう。それは、チームのリーダーになったり、メンバーになったりしながら、責任ある立場で行動し、仲間と協力することなどを学ぶ機会です。これらの機会は、少女や若い女性が実社会において、少年や男性と平等な立場で力を発揮し、よいパートナーシップを築くために重要なことです。誰もが役割と責任を持つ環境を提供することにより、それぞれの役割に必要なことを積極的に実践できる

ようにします。現実社会にある、固定観念による役割分担の意識を排除し、幅広い役割体験の機会を保障することが、少女・女性の可能性を伸ばすことにつながります。

◆
いろいろな種類のプログラムを自分たちで企画・運営し、好ましいリーダーシップのスタイルや意志決定、チームワーク、交渉、問題解決などを通し、リーダーをはじめとするいろいろな役割の体験ができるようにする必要があります。そのためには小グループは有効です。



5 異年齢集団と ロールモデルの存在



社会は異なる価値観の人々で構成されています。少女と女性の可能性を伸ばすためには、学校のようにいつも同じ学年で活動するのではなく、異なる考えや価値観を持つ人がいることを理解できる環境も不可欠です。異年齢の集団で活動することで、年長者の姿が、若い人々の成長にいつも何らかの影響を与えます。

少女にとって、同性の大人の指導者はロールモデルとして手本になります。同性であるということが、ロールモデルとしての必須条件です。中学生に将来の夢を聞いた調査では、男子ではスポーツ選手が45%を占め、次いで一流企業の社員19%、女子では、保育士33%、美容師31%、パティシェ24%という結果があります*。現在の日本では、スポーツ選手として活躍しているのは男性が多く、保育士として活躍しているのは女性が多いということに関連していると考えられます。

(※) ベネッセ教育総合研究所 モノグラフ中学生の世界2002年度 vol.73

◆
多種多様なロールモデルが身近にあることは、少女や若い女性が自らの未来を描くときに幅広い選択肢を提供できます。女性にも様々な価値観や職業を持つ人がいますから、「多様性」に触れる場をつくる、認める姿勢が大切です。母親だけでなく、いろいろな立場の女性に出会う機会は財産になります。

女性は経験したことがないことに足踏みをする傾向があり、危険を冒すことを嫌うことがあります。大人も失敗を恐れず、リスクをとり、挑戦し続けている姿や、グループでの活動を民主的に運営している姿、何より少女たちに接する時の姿が一番のロールモデルとなります。

◆
また、少女が接する年長の女性が、男性と対等なパートナーシップの姿を見せることも大切なことです。

パートナーシップが社会でどのように機能するか観察するためには、少女や少年は両性のお手本を必要としています。家族の型が変化するにつれて、社会によっては、男性と女性のお手本が家族に存在することが当たり前ではなくなっています。ですから、ガールガイド・ガールスカウトのような団体は重要な役割を担っているのです。

さまざまなリーダーシップ環境（野外、通常の集会など）で男性と女性がやりとりする様子は若い人たちによってよく観察されています。女性だけのグループで特定の活動を男性の指導者が指導する場合に、女性のリーダーが発するメッセージに気づくことが大切です。同様に、男女がグループを共同で指導するときにも、互いが協力している中でパートナーシップのモデルを見せるという責任があります。

(出典) World Association of Girls Guides and Girl Scouts, "Policy on the education of girls and young women in WAGGGS", 1998



6 ファシリテーター

少女・女性の可能性を伸ばすには、彼女たちの学び全体を調整・企画できる役割を担う人の存在が必要です。ここでは、それをファシリテーターと呼びます。

ファシリテーターは、学び全体のコーディネーターであり、あるときは励まし、あるときは助言を与え、またあるときは場の雰囲気を作り上げる役割を担います。しかし、あくまでも「学ぶ」「行動する」のは、少女・女性であり、彼女たちが学びの中心であることは、どのような学びの段階であっても変わりません。

◆
実際には、ここにあげる「少女・女性の可能性を伸ばす7つの条件」をコーディネートすることが期待されます。「昔はこうだった」というような、自分の過去や経験だけにしばられず、足元（現状）を見つめながら、常に少女たちの未来に視点を合わせま

しょう。

自分が経験したことがないことをするのは、大人にとっても不安なことです。しかしそのことで、少女の興味や関心のあることを支援できないということのないようにしましょう。女性の経験不足＝社会経験不足は、少女の活動を制限します。

◆
少女・若い女性の可能性を伸ばすためには、彼女たちの発達の段階に合わせ、ファシリテーターの接し方や役割が変化していきます。例えば、あるときは見守られることであり、あるときは経験を積んだ人からのアドバイスが必要です。学習場面において、教師から期待された生徒はその通りの結果を出す、と言われます（教師期待効果あるいはピグマリオン効果）。いかなる場面においても、少女たちに期待や励ましの言葉をかけましょう。



7 少女・女性のための環境



女子のための環境は、「少女・女性に安心感を与え、さまざまな機会を提供し、バランスよく力を育む」ということは、イギリスやアメリカ、オーストラリアのガールスカウトの調査及び、諸外国の女子のための別学環境での教育効果の研究において報告されています。そして、今回のガールスカウトの調査でも、日本でも効果があることが証明されました。

女子だけの環境は、「平等の機会ではなく、すべての機会 (every opportunity, not equal)」を作りだします。「間違いを恐れなくてやってみる」というリスクを受け入れることができ、異性の目がないので「女らしさ」に振り回されずにすみます。女性中心の教育方法が重視され、どんな分野・活動でも「やればできる」という自信が醸成されます。男女共学という環境が必ずしも「自動的」に女子の力を養うのではないようです。

今回の調査で、「女子だけで活動するマイナス点」について尋ねたところ、「女子の立場でしか考えない」や「いろいろな人の

意見が聞けない」といった、意見の偏りや多様性に欠けることを指摘する声がありました。また、活動内容の偏りや自ら制限を設けてしまう状況、例えば「できないことはやらない」「大きなイベントやアウトドアをあまりしない」ということが指摘されました。女子だけで活動することで、かえって、ジェンダーによる固定概念を助長していないかを意識することが大切です。

社会には男女共学場で力をつけていく女性も多く存在しますが、生活の一場面で、あるいは人生の一時期に、少女・女性のみという環境が保障されると、力をつけるスピードが速まり、可能性を伸ばす少女が増えることは、これらの調査からも明らかです。

いま、「女性的価値」が重視されています。集団的共同、共感、協調性、表現力など、女性ならではの価値観が、これからのリーダーシップに必要であるとされています。女性だけの環境では、こういった資質を深める機会がより多く得られます。

少女と若い女性が自らの可能性を最大限に伸ばすためには、彼女たちが力をつける（エンパワーする）こと、言い替えれば、自分たちの生き方に影響を与える決断を自分たちで下せるような力を与えられなければなりません。ガールガイド・ガールスカウトの教育プログラムはこれを達成するために、若い女性にスキルとそれを実践する機会を与えています。女性だけの環境のほうが、少女にとってより多くの機会を提供することができることが多く、このようなスキルを男性と共に社会で活用する自信を与えることになります。

(出典) World Association of Girl Guides and Girl Scouts, "Policy on the education of girls and young women in WAGGGS", 1998

真のパートナーシップを育てるために

少女や若い女性が、自分自身の人生のリーダーシップをとり、自らの可能性を最大限に発揮できるようにするための7つの条件を提案しました。7つの条件は、社会の中で少女と女性をどのように育てるかという姿勢の主張です。

少女や女性は、よりよい社会を構築する担い手となることを期待されており、そのために少女と女性の力をあらゆる場面で最大限に伸ばすことが必要です。

このことを実現する上で、少女と女性が、社会において、男性を含む他者との【パートナーシップ】においての責任を担えるように準備することが大切です。つまり、少女がその社会の一端を担えるように、実際の社会で貢献、参加、支援、指導、そして競争することができるよう準備しなければならないのです。

「対等のパートナーシップ」とは、異なったスキルや背景を持った人が一緒になり、活動にそれぞれが貢献する、という意味のパートナーシップです。パートナーシップとは、異なっているが大切な貢献をする、互いを受け入れる、責任や尊敬という概念を表すものです。

「パートナーシップの教育」は一人ひとりを同じに扱うことではありません。それよりも、各個人がスキルや姿勢を発

展させ、パートナーシップという環境で効果的に貢献できるように支援することです。そのためには、少女だけでなく、少年のためにも、パートナーシップについての教育が必要です。お互いの相違点や潜在的な能力について学び、お互いの特質や能力を尊重し、平和で公平な世界を築くための道を、共に探していくように学ぶ必要があります。

パートナーシップの教育の目的は、少女と少年が社会と家庭において、平等に責任を担えるような女性と男性に育つようにすることです。これを達成するために、少女と少年の両方が確実に「平等の機会」を持ち、双方の能力を強化、開発できるよう、お互いのつも異なった背景を考慮しなければなりません。そのためには、少なくとも今の日本においては、女性のみが環境が有効に働くのです。ただ、単に女子だけ、女性だけの環境が、少女・女性の可能性を伸ばす条件ではなく、プログラムや学び方、そしてそこにかかわる指導者（大人）の意識や行動が重要です。

男女共同参画社会においては、「あるべき姿」と「現実」が混同されることがあります。「機会の平等」と「結果の平等」を分けて考える必要もあります。同じように機会が与えられていても、結果として十分な力を育てていないのであれば、平等の結果を生むために、途中のやり方を一時変更する、異なる方法を試してみる、という勇気も必要です。

未来を創る女性を育てるために

「7つの条件」以外にも大人に留意してほしいことがあります。

□ メディアリテラシー（メディアを読み解く力）を高める

私たちは日々メディアから多くの情報を受け取っています。情報は発信者の価値観に沿って収集・編集されているので、どのような価値観がそこにあるのかを見抜く力が必要。

□ 多様な経験や価値観を持つ人との出会いを提供する

多様性は創造性をもたらします。多様な価値観を受け入れ、理解することは、共生社会を築く一歩となる。

□ 少女や若い女性の可能性を信じる

少女や若い女性は、一人ひとりが無限の可能性を有しているということを忘れない。

□ 少女の声を聞く

どんなふうに感じているのか どんなことを考えているのか どんなことに興味があるのか いつも少女の声に耳を傾けましょう。

□ 少女や女性の可能性を伸ばす環境を作るために、一歩先を歩くあなたができることをおこなう

社会の制度やしきみなど、あなたが声をあげることで変化を起こせることがあります。取り除く必要がある、取り除くべきバリアがあるならば、あなたから行動を起こしましょう。

参考資料

- 朝日新聞 「存在意義 探る女子大」 2008年9月16日
- 朝日新聞 「男女別学、減少の一途 高校全体の1割切る」 朝日新聞デジタル 2012年5月23日
- 生田久美子 『男女共学・別学を問いなおす 新しい議論のステージへ』 東洋館出版社 2011年
- 伊藤 崇浩 「注目の中高一貫校 校長が語る我が校のDNA」 東洋経済オンライン 2013年～
- ㈱エデュケーショナルネットワーク データ課 「E-REPORT特集男女共学と別学を再考する」 発行年不明
- OECD 「カントリーノート 図法で見る教育2013年版日本」
- OECD 「カントリーノート 国際成人力調査第1回結果」
- おおたとしまさ 『男子校という選択』 日本経済新聞出版社 2011年
- おおたとしまさ 『女子校という選択』 日本経済新聞出版社 2012年
- ガールスカウト日本連盟 『挑戦しつづける運動(第5版)』 2012年
- 木村涼子 『学校文化とジェンダー』 勁草書房 1999年
- 木村涼子、古久保さくら 『ジェンダーで考える教育の現在』 解放出版 2008年
- マイク・サドカー、デイヴィット・サドカー 『「女の子」は学校でつくられる』 時事通信社 1996年
- バク・スックチャ 「ガラパゴス化している日本の女性活用」 東洋経済オンライン 2013年3月
- スペトラーナ・スメタニナ 「男女別学のススメ」 ロシアNOW 2012年10月30日
- 竹信三恵子 『女性を活用する国、しない国』 岩波ブックレット 2010年
- 内閣官房内閣広報室 「日本女性エグゼクティブ協会発会式」 安倍首相スピーチ 2013年12月6日
- 内閣府・男女共同参画推進連携会議 「ひとりひとりが幸せな社会のために 男女共同参画社会の実現をめざして 平成25年度版」
- 内閣府男女共同参画局 「女性の政策・方針決定過程への参画状況の推移(総括表)」 平成25年12月26日
- 中原淳 「経験獲得競争社会を生きる!?: 資源化・資本化する直接経験!？」 中原淳ブログ 2013年4月21日
- 中西啓喜 「ジェンダー・トラックの再考: 私立女子校のカリキュラム再編の検討から」 お茶の水女子大学COEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」 2011年
- 中西祐子 『ジェンダー・トラックー青年期女性の進路形成と教育組織の社会学ー』 東洋館出版社 1998年
- 中西祐子 「ジェンダートラックー性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察ー」 『教育社会学研究』 第53集 1993年
- NettyLandかわら版 「アドバンスインターナショナル2012年9月号」 2012年
- 日刊スポーツオンライン 「共学より女子校で成績向上ー英民間が調査」 2009年3月19日
- 畠山勝太 「Education at a Glanceから見る日本の女子教育の現状と課題」 シノドス 2012年10月29日
- ベネッセ教育研究所 『モノグラフ・小学生ナウ2004年度 vol.24-3 男の子の世界・女の子の世界』 2004年
- ベネッセ教育研究所 『2004年度特別号モノグラフにみる高校生のすがた』 2004年度
- ベネッセ教育研究所 『2004年度特別号モノグラフにみる小学生のすがた』 2004年度
- ベネッセ教育研究所 『2004年度特別号モノグラフにみる中学生のすがた』 2004年度
- 三宅えり子 「女子大学と共学大学における女子教育力の比較研究ー試行的調査からー」 同志社女子大学 学術研究年報 2009年
- 三宅えり子 「女子大学と共学大学における女子教育力の比較研究ー試行的調査その2のデータ分析ー」 同志社女子大学 総合文化研究所紀要 2010年
- 吉原真理 「ハーバード・ビジネス・スクールのジェンダー格差是正実験」 プロゴス 2013年9月8日
- 読売新聞 「共学・別学」 読売新聞教育ルネッサンス連載記事 2006年10月～11月
- 読売新聞 「開成「最後まで男子校だ」・・・男女別学、1割切る」 2012年7月19日
- 山田礼子 「アメリカにおける女子大学の意義と挑戦 共学にはない、女性だけのためのリーダー教育」 カレッジマネジメント160 2010年1、2月
- ロイター通信 「男子生徒の成績、共学より男子校の方が良好 ニューゼーランド研究」 2009年8月25日
- Catherine Makino "Japanese 'Aunties' Party Presses for Gender Parity", WeNews, 23 September 2013
- National Association of Single Sex Public Education, "Single-Sex vs. Coed: The Evidence", www.singlesexshook.org
- Jeevan Vasagar, "Schools failing to help girls escape career stereotypes, says Ofsted", The Guardian, 12 April 2011
- BBC News, "Male teachers 'better for boys'", 29 August 2006
- BBC News, "GCSE results: Gender gap widens in record-breaking year", 25 August 2011
- BBC News, "GCSE results: Trends explained", 25 August 2010
- BBC News, "Girls 'beat boys' in skills-based science subjects, 5 July 2013
- BBC News, "GCSE changes to final exams 'will disadvantage girls'", 27 March 2013
- Girlguiding UK, "What girls say about... Equality for girls Girls' Attitudes Survey 2013", 2013
- Girlguiding UK, "Girls shout out! A UK-wide research report", 2007
- Girl Scouts of the USA, "The Girl Difference: Short-Circuiting the Myth of the Technophobic Girl", 2001
- Girl Scouts of the USA, "Girl Scouting Works, the alumnae impact study", 2012
- Jennifer Ann Lalor "Helping girls and young women grow into confident, selfrespecting, responsible community members A Case Study of Girl Guides Australia" Science and Mathematics Education Centre, 2011
- OECD, "Equally prepared for life? How 15-year-old boys and girls perform in school", 2009
- Alison L. Booth, Lina Cardona Sosa, Patrick J. Nolen, "Gender Differences in Risk Aversion: Do Single-Sex Environments Affect their Development?", Journal of Economic Behavior & Organization, March 2014
- World Association of Girls Guides and Girl Scouts, "Policy on the education of girls and young women in WAGGGS", 1998
- World Association of Girl Guides and Girl Scouts, "WAGGGS Position Statement MDG3 Girls' and young women's empowerment", 2012
- World Association of Girl Guides and Girl Scouts, "World Thinking Day 2014 MDG2 Activity Pack", 2014

女性が可能性を伸ばせる社会と、 ガールスカウトの挑戦



2013年10月12日、首相官邸。10月11日の国際ガールズ・デーを記念し、ガールスカウトが安倍首相に「Girls in the Lead - 少女たちが創る、日本の未来」を宣言

ガールスカウトは、「女性が自らの可能性を最大限に伸ばし、発揮できる社会」の実現をめざしています。それは、「ワーク・ライフ・バランスがとれている社会」であり、「自分の将来を制限なく自由に描くことができ、あらゆる選択肢が保障されている社会」です。そこには、性別による制限や男女間格差（ジェンダーギャップ）は存在しません。

私たちは、自分の選択で人生をつくることのできる力やスキルをもった少女・女性を育てると同時に、ガールスカウトがこうした社会を実現できるための行動ができることを目指しています。ガールスカウトは、行動のための「練習」の機会や場面も提供できる場所です。社会の中で男女共に行動できる経験や自信が足りないと感じれば、ガールスカウトの中でさまざまな経験を積み重ねながら、自分を高めていけます。

ガールスカウトで育てようとしている力とは、「自分自身の人生を生きる力」とも言えます。それは、「自分の人生を切り拓く力」、つまり「自分の人生」のリーダーシップ（舵取り）をとれる力です。「自分の生き方に影響を与える決断を、自分で下せる力」です。世の中にはたくさん人の選択肢があることや、自分には可能性があることを知り、自分の力は制限なく高めることができるという実感を持ち、挑戦しよう、叶えよう、なりたい自分になろう、社会の役に立ちたい、貢献したいと思うことができ、自分を見出すことができる。そのための経験や「練習」ができるガールスカウトが求められます。

それは、自分を幸せにするリーダーシップ、自分を幸せな方向に導く力をつけること。「あなたの人生はあなたのものであるから、自分で自分を幸せにしないといけない」のです。

ただそれは独りよがりなものではありません。そこには必ず人とのかわりがあり、幸せとは自分だけのものではない、人を幸せにしてこそ自分の幸せがある、自分が活かされてこそ幸せと感じる、まわりの人も共に幸せとなる、という価値観をガールスカウトは大切にしており、どんな立場や職業に就くにも、社会の一市民としての責任を果たす、ということは、今までにも増して重要視している価値観です。そのための力を伸ばせるところがガールスカウトです。

ガールスカウトは力をつけた人をたくさんつくる。

そのことによって、よい社会をつくる。

みんなが自分の人生を選択できる。

その選択肢の数で、幸せが多い社会かどうかが決まるのです。



ガールスカウト日本連盟の 「長年の課題」への挑戦

学校法人恵泉女学園
学園長

松下 俱子氏

このたびガールスカウト日本連盟が数年にわたる調査、研究をもとにこの報告書をまとめ、公表することとした努力に敬意を捧げたいと思います。

ガールスカウト運動が日本の少女たちに紹介されたのは1920年、いまから93年前のことです。教師として来日したイギリス人女性が、本国で自身が参加していたガールガイドの活動を赴任校で実践したことが始まりでした。

本国—イギリスはボーイスカウト運動発祥の国、ある時ボーイスカウトの大会がおこなわれた折、少年たちに混ざって数人の少女が少年と同じような服装で整列しており、大人の指導者をびっくりさせたのでした。

大人の考えで、大人の指導者が呼びかけたのではなく、少女自身が望んで活動を始めた運動でした。少年のために始めたことが少女にとっても魅力があることを知って、少女のための団体も（ガールガイドと名づけられて）組織することになりましたが、指導者については“少女の教育は女性が望ましい”と考えられ、女性がリーダーとなりました。その後、この運動は世界中に広がりました（2014年現在145カ国）が、多くの国では少女会員と女性指導者による活動を展開してきました。

21世紀になって、「女子教育」は必要ないとか時代遅れだとか、男女平等なのだから（あるいは男女共同参画社会なのだから）、男子と女子は同じ場面で教育を受けるべきだという意見が聞かれるようになりました。そうした風潮に応えるかのように、世界にはボーイスカウトとガールガイド（スカウト）の連盟を統合した国、実際の活動を合同でおこなっている国などが生まれています。日本のボーイスカウト日本連盟も1995年から少女を会員として受け入れて、一緒に活動しています。このような事情を背景に、原則として少女の活動を女性の指導者が支援するという考え方を継承しているガールスカウト日本連盟は「なぜ、女性が少女を育てるのか」を説明することを求められることがありました。

5歳児から高等学校3年生相当年齢までの少女たちのために、スカウト運動の基本理念と日本独自の目標、教育プログラムによって教育活動を展開している日本連盟は以前から、なぜ少女だけ？なぜ女性指導者だけ？に理論的裏づけを伴う説明で応える取り組みを続けてきたと言えます。

少女たちがさまざまなガールスカウトとしての実体験を重ねて、全人的成長をして行くことは確実に、指導者の喜びであることがこの運動の全国への広がりをもたらしたのだと思います。今回、上記の「理論的裏づけを伴う説明」を試みることに着手して調査を実施した結果、少女たちにとってガールスカウト活動がその成長に教育的効果を添えるということについて、一定の研究結果を得ることができたということです。この報告によって、より多くの方がたがガールスカウト運動への理解を深め、少女たちが活動に参加することを勧め、活動を支援してくださるようになることを切に望みます。

声をあげよう（編集後記にかえて）

2011年春に「女子だけで活動することの意義」を検証するための委員会が立ち上がって
から、この報告書が完成するまで3年が経ちました。かねてから課題であった「ガールス
スカウトで育つ力」についても実証することとなりました。その中で、国内外の文献にあたり、
多くの議論を重ねていく中で、日本社会には、少女に関するデータが非常に少ない
ことを痛切に感じました。女子だけで活動する意義を検証するために、女子校に関する
データも探しましたが、なかなか見つからない…。

その間、日本の女性の地位は一進一退。ついには「女性の活躍」が政策に含まれるよ
うになりましたが、「少女の力を育てる」という政策を耳にすることはありません。

それなら、誰の手でもなく、自分たちの手で。

ガールスカウトは、誰かがしてくれるのを待っているではありません。

これからますます、一人でも多くの少女たちがチカラをつけて、日本の女性を取り巻く環
境や社会の諸問題に対して声をあげていかなければなりません。

一緒になら、この世界を変えられる！

きっと、変えられます。

2014年3月

公益社団法人ガールスカウト日本連盟

日本のガールスカウト教育を考える会

委員長 河合千尋 委員 片岡麻里 加藤貴子 園屋恵美子 西とも子

事務局 関由加里

本調査研究の実施にあたり、アンケートやインタビューにご協力いただいた学校関係者
の皆様、一般の中学生・高校生・大学生、そしてガールスカウト関係者の皆様に深く
感謝申し上げます。

女の子はもっと伸びる

未来を担う少女たちに今 必要なチカラと環境

発行 2014年3月

発行者 公益社団法人ガールスカウト日本連盟

〒151-0066 東京都渋谷区西原1丁目40番3号

TEL : 03-3460-0701 FAX : 03-3460-8383 E-mail : gsj@girlscout.or.jp

<http://www.girlscout.or.jp>

デザイン・印刷 株式会社 トライ

わたしが変わる。 未来が変わる。

変えよう。もっと世界をしあわせにするために。

変わろう。もっと素敵な自分になるために。

ガールスカウトは世界中で女性の幸せを願う団体。

そこで活動する事はきっと世界の未来を変えること。

私たちひとりひとりのチカラで、明日の世界は変わる。

わたしが変われば、

未来が変わる。